

# 婦人十子



## 第八卷 第一號

### 本號要目

- 初夢 後藤ちとせ
- 家庭に於ける諸儀式 後閑菊野
- 小供と大人 文學士 加藤玄智
- 切實細工に就いて 藤五代策
- 幼兒教育雜觀 白山生
- 保姆となりし最初の一週間 某教生
- 狸學と文學 川口孫次郎
- 春の料理 石井泰次郎
- 狼と羊と白菜 硯山子
- 不思議な藥 硯山人
- めびの話 漁翁

謹んで新年を賀  
し併せて會員並  
に讀者諸君の萬  
福を禱る

明治四十一年一月元旦

フレールベル會幹事一同

## 投稿募集

一種類 ●お伽話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分  
選擇の上本誌に載録せるものは  
一般記事 内規により原稿料を呈す

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取  
らすして其指定する人に本會より直接送ることを得  
一注意 お伽話及一般は記事一行廿二字語にて半紙又は罫紙に書  
かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎  
月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて  
行く積りです。  
宛名は本會へ直接御送り下さい。

開き封で応募原稿と標記すれば三十匁迄は郵税二錢で参ります。

### 質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する  
事なら何でもお尋ね下さい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速  
に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

### 入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年  
分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登錄して雜誌を發送致  
します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會  
か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

一册郵税共金拾一錢 ●六册前金郵税共六拾錢

●拾二册同金壹圓貳拾錢 ●郵券代用一割増

いとこいしがそい



(泰西名畫)



第八卷第一號

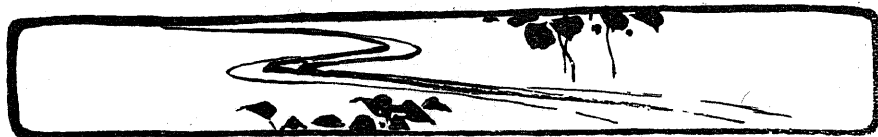
謹賀新年

年<sup>とし</sup>たちかへるあしたの  
 空<sup>そら</sup>のけしき、名<sup>な</sup>残<sup>ごり</sup>なく曇<sup>曇り</sup>  
 らぬうらゝけさにいつ  
 しかとけしき立つ霞<sup>かすみ</sup>に  
 木<sup>き</sup>の芽<sup>め</sup>も打<sup>う</sup>けぶりふの  
 づから人の心<sup>こころ</sup>ものびら  
 かに見<sup>み</sup>ゆるぞかし。

(紫式部)

☆  
☆  
☆

☆  
☆  
☆



初夢



ごとうちとせ

明けまして御目出度う御座います、雜誌婦人と子供も生れ出で、茲に入歳幼兒ならば今年から小学校へ通ひ初むるめでたき年、フレイベル會は創立以來丁度十三年目、十三と云ふと昔ならもう元服して一人前になつた人もあつたといふ結構な年で、之から愈々會も雜誌も大に發展すること、初春ながら一入にめてたく嬉しく存せられます

去年と今年のわけ目の夜半として世は忙はしい大晦日を除夜の述懐よ何よやよと遊び送る閑散な身は愛讀の婦人と子供一卷十二冊とち合し面白さ節々讀み回して眠りにつくとのほ不思議身はいつか途上の人となつて居ります、走る電車に行き交

ふ御馬車、松竹に七五三繩、軒毎の日の大御旗のひらめき、赤のリボンの羽子つき合や、水兵服の風上けやと如何にも賑はしい町々を通る、どうやら小川町の様だと思ふと足は早勸工場を左に見て右外濠の線路に向つて進んで居ります、扱て甲賀町の中程へ來ると驚いたの驚かないのとアノ殺風景な電車の車庫が一夜のうちに取り拂はれて、代りに建つた和洋折衷のゆかしき一棟！昔大名の御邸宅に見た様な卵色の立派な塀、植込められた松並の枝もたわゝにかゝれる白雪、知らぬ間に誰れの仕わざや昔なにかの御伽噺に聞いた事の様だが」と塀について進みますと何處ともなく奏樂ピアノの響、續きて起る君か代の合唱、一愛らしき幼兒の其讀聲は確かに件の建物よりのひびき、扱ては此處新設の幼稚園なりけり、公立にや私立にや、一度保育に係はりし身の何となく問まはしくてと云ふ譯で大門たづねて袋町に廻りますと是はそも如何に！こは是れ實にフレイベル會創立の幼稚園！其の立派な檜の門柱に筆太に書き掲げられたる門札によつてわかつたのです、ハテ昨夜讀んだ

「婦人と子供には何と云ふ報告も無かつたが、……而し會員の一人だから見せて呉れない譯もあるまいとそろ／＼門内に入りますと右の花壇には春の花、左のそれには秋の草、彼方には小鳥の囀り、此方には小羊のさまよひ、園内ひっそりとして夕べの間に龍宮が卅世の中に浮び出たかと怪しまる、計り、正面なる大玄關に行つて呼鈴を押すと學生らしい女小使

只今御子がたが式を遊ばして居らるので先生方も皆アチラに御出で御座いますかアノ謹様とやさしげにいふ

何某様が御出でになるやら少とも存じませんが御園のなづかしさに一寸參觀を、アノ會員の一人で御座いますから、と園長様に御話して下さ

傍へなる應接室に入ると先づ目についたのは壁上の揭示

兼ねて本會より保育事業研究の爲歐米に留學せられたる振鈴會子氏螢雪の功成り昨春歸朝爾後一年茲に開園の機運に向へり

云々の語つまりは創立の主意保育事業の必要をときたる主意書である

マア何と御目出度い事で、くづ／＼病みあかして居るうちに斯る立派な事業が婦人の手によつてなつたかと驚き入つて居りますと彼方の室では年の始めのーのと云ふのが終つて活潑な小靴の音が廊下を通る愛らしい聲も聞える、やがて玄關前が一寸混雑小さい制服つけた愛らしいのが手に手をとつて歸りゆく百二三十名もあつたであらうか、後は復たひっそり、室のドアが開いたと思ふと

二十六七の上品な保姆君

「アラまわ何那樣かと思ひましたら先生で御座いましたか? 御久し振りで。御別れ申してから何年になりますかしら大層おふけになりました、

で、

茲で又驚く「扱てはどんなに年老いたらら机上の硯箱を玉手箱かと疑ふ

どなたで御座いましたネ? 年をとるとこれだからいけません

未だうら若いと云うて呉れ、ばい、にとの悔しさ

をふしかくして云ふ

「ソウで御座いましたかあの御茶の水幼稚園の保育實習科に居りました者で、ナニ一寸先生に御世話いたしました丈ですぐ御別れいたしましたから」

「オヤマア左様で御座いましたか失禮いたしました」

扱て此幼稚園の事は少しも知らずに居つたがと聞くと此保姆君流石は御茶の水育ち、中々甘く話す人でフレーベル會の發展、幹事方の御熱心、會員諸氏の御盡力、扱ては嘗て保姆なりし何某氏か此度大家の夫人となられたので本會に二万圓の大金を寄附された事それで此幼稚園が建てられたこと敷地は婦人の幹事達が御熱心にめづられて何宮様とか貴さあたりより借用御許しを蒙つた事、當園設計は實に幹事長其他の數年以來の考案を理想的に實現された事、本會の本部も御茶の水の幼稚園から離れ獨立して此建物内に移された事、此三月には甲賀町に向いた方に一大書肆を新設して、フレーベル會編輯部で編纂したる幾多有益なる書類

を發賣する事其著書中には世界の保育界を驚かしたる大作もある事、編輯係りには角帽上りの方も

三人是も御婦人な事、書肆の隣りには大きな玩具

店を設けて模範的玩具併びに幼稚園恩物、及び手

藝の材料を全國に向つて供給する事該玩具店では

外國の注文に、どん／＼應じた事イヤ來年當りよ

り應ずべき事、雜誌婦人と子供は世界各國の有ら

ゆる幼稚園に配附せられ好評噴々近來は歐米教育

家の寄稿せらるゝもの甚だ多きに至た事、ア、其

れから當園には附屬養育所といふのがあつて貧民

の幼児等を預り育て、居る事、遊園設備の完全な

のは實に世界に其比を見ずといふ事萬事斯の如き

有様故此程天國より月夜劉曉たる奏樂の下五人の

天使が舞ひ下つて「天上なるフレーベル大先生よ

りフレーベル會の大發展を嘉す」といふ有難い御

言葉とたまはり其時期はつた月桂冠はアノ遊戯室

の正面に白木檜の立派な御棚に安置し奉つてある

事斯る大發展に伴ひ全國會員の數實に萬を以て數

ふるに至り各縣に支部を置き毎歲四月二十一日の

總會の盛大さは戦後に於ける愛國婦人會のそのの

如く之に參會せんとて態々日本に渡つて來た歐米婦人も數々見えて居つた事等、イヤハヤ續げ様に面白く話したまはるので只驚嘆の外なく

「まわ」  
と云つた其大聲に思はず目覺ひれば何ぞ是れ楠河の一夢！鶏鳴曉を報じて明治四十一年の初春めでたく明け渡りたり、夕べ讀みさしたる「婦人と子供」の長閑なる朝風うけてヒラヒラと纏りたるは

「さなり十年後のフレール會は汝が初夢の如く然り」  
といふにやわらむ。一年の計畫は元旦にありとか會の前途を祝したる初夢！記して以て新年の詞に代へた次第で御座います。

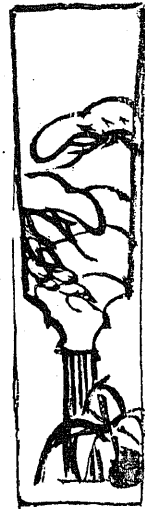


△日本人包圍せらる

(某氏談)

余か或日岩本茂三郎氏（實業練習生なりしが、不幸數週前、米國に死せり）とマサチューセツト州の某市に散步し、一隊の兒童に會へり余曰く「カムオン」一、群兒余に近づき來りたれば、試みに其中の三兒に一仙宛を與へたるに、群兒は九萬蜂の軍を破りたるが如く一齋に「ギヴ、ミー、エ、セント」〜（一仙呉れ）と呼び出し、余を擁して、坂路を上り來ること二丁目餘、「去れ」〜と號令するも、いッかな肯がす、乃ち彼等に謂つて曰く「已れはもう錢がない、彼處に居る日本人は澤山持つて居るから、彼處に行け」群兒聞ふ「彼の名は何」曰く「セオ一ッ」是に於て乎、群兒忽ち轉じて、向側を歩るきつゝ、ありし岩本氏に向て、一齊射撃を試み、氏を包圍して「セオ一ッ、ギヴ、ミー、エ、セント」と吶喊したり、氏は年少にして、且つ其性極めて穩順なるを以て、進退殆ど谷まるが如く見えしが、余は此機に乗じ路を轉じて、寓居に歸り、支關の椅子に凭れて兵を待ち居りしに、饒て三十分も立ちたりと思ふ頃、氏は息も絶ええくにて歸來し、「ア、阿米利加に來てから、こんな目に會つたことは一度もない、仕方がないから二十五仙出して之を分配しろといつて、辛らくも旅順口から逃げ出した」





家庭に於ける諸儀式 (承前)

後閑 菊野

其五 歳首の祝

舊年を無事に送つて新年を平らかに迎へたのを喜ぶのは自然の人情でございませう。殊に公に於ても國をおぼし民をおぼす大御心からとりわけて新年をお祝ひになるのでございませう。からめいゝの家に於ても相當の禮を備へて祝意を表すべきであります。

一月一日の公の御儀式を四方拜と申します。四方拜とは天皇陛下が御親ら天地四方山陵に向はせられ御拜を遊ばされて當年の豐饗を祈り天災地妖を拂ひ給ふ御式でございませう。今の御代に於ては午前四時に天皇四方を拜し給ふ先づ西方皇大神宮を并し次に天神地祇を拜し又神武天皇の御陵及び孝明天皇の御陵を拜し其の他四方の神社を拜し給ひ畢り

賢所 皇靈殿及び神殿を拜し給ふ御定めなるよし細川氏の祝祭日講話に載せてございませう。昔は上御一人のみならず庶民に至るまで各之を行つたことが古書に見えて居ります。

此の日各家に於て行ふ儀式は其の家の貧富身分の高下などによりまして一様ではございませう。けれども之が標準として一例を擧げて見ませう。歳末から門には松を立て又は注連飾をなし家の内外をよく掃き清めて新年を迎へる準備をいたしま

す。座敷床の間の裝飾は家々によりて同じではございませう。が舊慣によりませう。新年にふさはしい掛物をかけ松竹梅などの花を活け又鏡餅、鬘斗などをも飾つて祝意を表するが普通でございませう。新年はふのづから人の心もあらたまるのでございませう。から特別の裝飾をして一家恙なく新年を迎へたことを祝ひ兼ねて年賀の客を歓迎する意をあらはすやうにしたこととございませう。例へば掛物が松竹梅の三幅對であるならば活花は椿又は南天に水仙など青とか二幅對で竹と梅との畫で

あるならば花を松とし寒菊をあしらふなど又花を松竹梅とするならば掛物は福神の一幅物など、するが似合はしいではございませすまいか置物も鶴龜又は福神などめでたいものを選び又鏡餅の臺をおくもよろしうございませう棚飾はやはりいつもの如く軸物、書籍、香具、手箱、寶石の類を位置よく配列し又歳首には特に熨斗三方を押板の處におくこともございませう序に申しますが舊幕府の頃には年始の客に對しては必ず熨斗三方を出す習ひでありましたが今大かた廢れました只床又は棚の飾りに用ゐるのみとなりました然し舊式を守る家に於てはやはり之を年賀の客に供することがないでもございませせん

次には祝の式のことを申しませう

一月一日は朝早く起きて手洗ひ口漱ぎ頭髮を調へ衣服を改め神前に鏡餅及び其の他の供物を進め燈火を點じ然る後天照大神を拜して皇室の御繁榮を祝し奉り次に祖宗の靈を拜するがよろしうございませすさて後一家打寄つて互に年始の祝言を述べたるが普通でございませう若し數多の婢僕を使ふ家

ならばまた夫等の者の祝賀をも受け然る後各の前祝の膳を供へ屠蘇を持ち出で、幼者から飲み初めます屠蘇の肴にはごまめ、敷の子、黑豆などを添へることが習はしになつて居ります

屠蘇の祝は古くから行はれたこととございまして朝廷に於ても昔から行ひになつたことが諸書に見えて居ります内々行事に二袋紅の切にて五寸ほどに鱗形にして柳の枝に糸にてつくつとわり又韻語陽秋に或人問屠蘇は必ず幼者より始むるは何の故ぞや答へて曰く少者は歳を得て倍々榮ゆるが故に之を先にす老者は歳を失ひて衰ふるが故に後にす天子元旦四方拜の後に御齒固を供へ而して典藥頭屠蘇酒及び白散を獻じ藥子をして先づ之を嘗め試みしめ然る後之を奉る嵯峨天皇弘仁年中始めて之を行はせられ今に至るまで士庶人亦之を用ゐるなりと記されて居ります

此の祝式は三ヶ日毎朝之を行ふ家もございませす又略して一日のみに止める家もございませす又其の家の貧富や家風に從て其の式にも輕重の別がございませすけれども其の精神に至つては何れもかは

ることはございませぬ  
 祝式しゆしきが終おひりましたらば或あるひは朝賀あさむかひに或あるひは學校がくちやうの遙拜ちやうはい  
 式しきに或あるひは年賀ねんがの廻禮かいらいにかもむくなど人々ひとびと家々いへごとの事  
 情じやうに従したがふがよろしうございます二日ふたひ及び三日みっぴも亦  
 一日いちひに準じゆんじて總べての式しきを行おこなひます昔むかしは二日ふたひは事  
 始めと申まをして書初かきま、讀初よみま、縫初ぬいぞめなどいろくの業  
 を初はじめる式しきを行おこなひました子供こどもなどに之これをさせます  
 のは家庭かてい教育がくやう上うへにおもしろいこと、ぞんじます今商  
 家かで二日に初荷はつにを出だしますのも同じ心こころでございま  
 せう

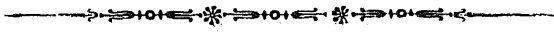
五日ごひは新年しんねん宴會えんかいとして百官ひやくくわん諸臣しよしんに宴えんを賜たまふ日ひでござ  
 います其そのの恩命おんめいを受うけるものは君恩きんおんの忝かたじけなきを思  
 ひ謹つしんで皇室こていの御榮ぎよえいを祝いわひ奉たごるべきでございます  
 六日むろひ或あるひは七日ななひには門松かどまつ注連飾しゆまゐりなどをとりいれて平  
 常じやうじやうに従したがするが例れいでございます七日ななひはすい菜すいさい、すい  
 しろ、五行ごぎやうはこべら、佛ほとけの座ざ、芹せりななづなの七く  
 さを集あつめ之これを粥かゆに雜まじへ餅もちを入れて七種しちしゆ粥かゆとなへ  
 之これを食たぶる習なづかひはしがありません今いまもなほ此こゝの日ひには  
 餅もちを入れ菜なをまじへて粥かゆをつくる家いへが澤山たくさんござい  
 ます

十五日ごじふひは小豆粥あづきかゆを煮にる習なづかひはしでございます土佐  
 日記にっぴ正月しんげつ十五日ごじふひの條じやうに『けふあづきかゆ煮にる習なづか  
 をし云々』とあるを見みますれば古ふるくからの習なづかひはし  
 と見みえます  
 又昔武またむかしぶでは具足ぐそくに鏡餅かがみもちを供たまへて軍神ぐんじんを祭まつ  
 ふことがありましたその鏡餅かがみもちを煮にて祝いわふのを鏡開かがみひら  
 と申まをしまして足利將軍あしかがしやうぐん家いへでは正月しんげつ二十日にじふひに行おこなはれ  
 徳川家とくがわいへの頃ころは十一日じふいちひに行おこなはれる定めであつたと申  
 します。

次つぎには年賀ねんがの客きやくに接せつする心得こころえを述べませう  
 年賀ねんがのため訪問ほうもんを受うけましたときは隊かた装飾さうしやくの  
 してある座敷ざしきに案内あんないして相當たいじやうの場處ばうぢよに着座ちやくざさせ主  
 人にんが出て新年しんねんの挨拶あいさつをのべ茶ちやをすしめ菓子かしを供たまへ  
 次に屠蘇とそを進すすめ普通ふつうの年賀客ねんがきやくに進すすめる膳部ぜんぶは  
 吸物あひもの、口取くちと、煮豆にまめ、數かずの子こなどで十分じふぶんでございま  
 せう猶別なほべつに酒さけや飯いひを進すすめようと思おもひますときには  
 相當たいじやうの品種ひんしゆを添そへることは人々ひとびとの隨意じゆいでございま  
 す屠蘇とそは銚子しやうしに入れ三つ組みつぐみの盃さかづきを臺たいに載のせて出  
 すが普通ふつうでございます正式せいしきは三献さんけんを進すすめる筈はずで  
 ございますからたとへ客きやくは辭退じたいをしましても一獻いつけん即

ち三度は必ず注ぐべきものでございませう  
 年賀の客は大抵僅の時間で數十軒を訪問しようとするのでありまして道を急ぐ人でありませうから大  
 概は玄關で賀辭を述べて直に歸るが常でありませう  
 として道の遠いためとか多忙のためとかで平素は無沙汰をする人も年の始ばかりは特に訪問して交  
 情を温めようとする人が多いのでございませうそれ  
 に只下婢或は年の若い書生などに取次をさせ甚  
 しいのは名刺臺ばかりを置いて折角の好意を空し  
 くするのは交際の法を得たものではございませう  
 故になるべく主婦もしくは家族中で之に次ぐ處の  
 人が親ら出まして應接しますならば來訪者をして  
 満足させることが出來從て客を遇する禮を全う  
 したものと云ふことが出來ませう  
 次に年賀の爲他を訪問するときの心得を申しま  
 せう家内の祝式を終へました後は尊長者を始めと  
 して親戚知己等日頃から交際する家々を訪問して  
 新年の賀詞を述べることがよろしうございませう服装は  
 男女とも禮服を着用すべきでありませうたとへ親し  
 い間柄でも餘り略したのは失禮に當ることござい

いますから身分相應に盛裝するがよろしうござい  
 ませうさて一通りの挨拶が終りましたらば時宜を見  
 はからひまして床飾などを見ますこともございませ  
 う之は主人の用意に對する禮儀の一つでござい  
 ませう又熨斗三方などを出されましたときは叮嚀に  
 之を受けて挨拶をすべきでございませう屠蘇を出さ  
 れたる時主人から進められましたらば三度即ち一  
 獻は必ず之を受けるがよろしうございませう一杯で  
 止めるのはよろしくありませぬ  
 年賀の訪問には必ず名刺を持つて往くがよろしう  
 ございませうさもないうときは來客の多い新年の折柄  
 といひ又は不在のことも多い時でありませうから混  
 雑したりまたは間違を生じなどして好意を空しく  
 することがございませう  
 年賀の廻禮は家々の事情によつてしかと定めるこ  
 とはできませぬが成るべくは七日以前に於てする  
 がよろしうございませうそれより後になりますと一  
 般に新年の諸飾をも取り去り饗應の具なども平生  
 に復しませうから萬事が複雑に赴き敏捷を主とせ  
 ねばならぬ今日におきましては成るべく遅延せぬ



やう務めるが交際上至當のことです。近々歳首に於ける交際上の煩ひを厭つて近郷に旅行を試みる人が年々多くなるやうです。之は大なる誤りでございませう前にも申し通り元來新年の交際は交情を温めるに於て必要のことです。でございませうから務めて此の時期を利用して平素の缺禮を償ふやうに心懸けねばなりません。尤も身體の虚弱な人などは数日の休暇を得て或は海邊に出かけたり或は暖地に移つたりして保養をするといふことも然るべきことで決して咎むべきではありません。せいかばせんに世間には懶惰の人がありまして實際に旅行もしないのに表面上不在を粧つて家の中に籠り安逸を貪るといふやうなことがあるさうです。でございませう之は不徳の甚しいものといつてよいのでございませう。

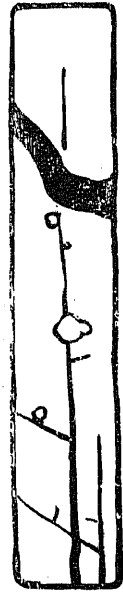
終りに忌服ある家のことに就いて一言申しおへておきませう。忌服のある家では新年の諸飾を廢し祝式を擧げぬが至當でございませう。けれども世務繁多なる今日に於ては五十日の忌でもなほ籠居するといふ譯にはゆかぬのでございませうからとて一

ケ年間の喪に服して一切世事を顧みぬといふやうなことは行はるべきことではございませう。それでございませうから新年なども人を訪問するのは憚るがよろしうございませうけれども他からの賀詞を受けることは差支はございませう。但し家内に於ける諸祝式は喪中に於ては一切行はぬが當然でございませう。又國民一般に哀悼の意を表はすべき不幸に遭ひましたときは新年の諸祝式一切を廢するは勿論のことです。でございませう。

又忌服ある家に對しては如何すべきかと申せば忌中は勿論新喪から凡そ六ヶ月以内は新年の賀詞を述べないがよろしうございませう。故に此の場合に於ては一月七日以後に於て普通の訪問をして慰愉の意を表はすやうにするがよろしいでございませう。

△之は困つたもの

余の日本に在る頃、一友嘆じて曰く「僕一兒あり、辭職に入、彼れに貯蓄心を養成せんと欲し、與へるに通信者手切手貯金帳を以てし、使を爲す毎に、一錢乃至錢の切手と與ふるの制を定めたり。最初の中は、彼れ其好奇心より、貼付せる切手の増加するを喜びしが、忽ち厭き果て、一僕に錢なんぞは要らない、誰か使なんぞをするもか、一威張り、到底貯蓄の習慣を養ふ能はず、士族根性も困つたものだ、此れ實に困つたものなり」



# 小供と大人

文學士 加藤 玄智

私は全く幼稚園や小學校の教育には門外漢であります。私の専門とする宗教とはへたである事であつて諸君より承りたい位です。かつて御断り致しました。是非出なければならぬ理由があつて自然に導かれ出ました。その理は他ではありませぬ。實は私の子供が當幼稚園に四月以來御厄介になつて居りました。その關係上是非とのことで材料がなければ父兄としての所感でもとの實にのつひきならぬことで。子供が世話になつて居るのに父兄として何等の考がないと申上るのは失禮のことだと思つてやむを得ず出たのであります。そうかと申して何も申し上げる事はありませぬが只父兄懇話會の席上で自分の子供に就て申し上げる様な次第で誠に平凡な常の料理極々まづい手料理を申し上

ぐるのであります。所で私の題はかりに名づけて小供と大人とでも申しませうか。日本ではどこへまゐつても大人が子供にむかひておとなしくせよとの注文が多い。日本人は之が習慣となつて殊に男兒などにむかつては口癖の様である。おとなしくせよといふことは即ち大人らしくせよといふことであつて、小供を大人の如く早く立派にしたいと思ふのは無理のことではないが一方からはキリスト教のバイブルを繙くに「汝等幼兒の如くならざれば天國に入ることあたはず」と云つて居る。かくいひながら一方では小供に向つて大人の如くなれといひ、一方では聖人夫子が大人に向つて小供の如くなれとすゝめて居る。これは明に矛盾のことと見受けられる。支那の語に大人は赤子の心を失はざるものなりと云ふて居る。大人は即ち偉人を指したのであるから偉人の如くなるには赤子の如かれと云ふのである。然るに小供には大人になれとは何としても矛盾である、米國にながく居て西洋にかぶれた友人

が歸つて来て私に申しますには日本で小供に大人  
 らしくせよといふのは自分は大嫌いであるといふ  
 て居る。之れは一理あることでキリスト教を信ず  
 る歐米社會の空氣を吸ひし人に無理もないことで  
 あると思ふ即ち支那の教にもキリスト等しく偉人  
 は赤子の心を失はないといふ之の二格言は矛盾で  
 あるが然し自分はこの二者の何れをも採れると思  
 ふ。即ち次の如くこの矛盾を解かうと思ふ。  
 一寸これを解く前につくく考いて見ますと、一  
 人小供だけでなく大人にあつても二つの社會に住  
 むと云ふ事が出来ます即ち一は自然界一は道德界  
 である。私共はこの二者に屬して居る。吾々は一  
 方では肉体を持つて居る。それと同時に靈即ち精  
 神を持つて居る。肉体の世界は自然界、精神の世  
 界は道德界である。どんな動物でも肉体を持つて  
 居るこの點に於ては吾々は同一である。然し之等  
 は人間か有する如き精神は持つてゐない。他の動  
 物は人間らしき道德を有するものはないのであら  
 う、其他知力の進歩も差があるでせう。其他人間  
 以外の動物にも其一部分はありますけれども人間

の如く完全にはない。鳩に三枝の禮ありといふよ  
 りいへば他の動物にも道德の萌芽があります。人  
 間は動物と共通に有する自然界であると同時に精  
 神と云ふ高尚なる界を持つて居るから吾々人間は自  
 然界の満足を壓しても道德界の要求を満たさなけ  
 ればならぬので身を殺しても仁をなす或は君の馬  
 前に戰死する。之れが人間と動物と異なり萬物の  
 靈長たるわけである。小供はどふかと云ふに小供  
 も人間たる以上は將來道德界にも住むべきもので  
 幼稚ながらも其意味に於て人格を以て居ります。  
 けれども幼稚であるから本能の大部分は他の動物  
 に屬して居る將來は小供も道德界に住する素質を  
 有して居るけれども、若し之を放置するならば性  
 慾の向ふ所は本能の欲するまゝにのみ走る傾向さ  
 がある。之れは進化の止むを得ざる處であるつま  
 りこの世界を達観してみると、自然界と道德界  
 即ち肉体と精神との衝突である。之れが此の世界  
 の現象であります。肉体は死ぬ事を忌むけれども  
 道德は之れを命じます。即ち身を殺しても仁をな  
 すと云ふ事もこの意を證明して居るのではない

か。之れが世界の真相浮世の狀態なので、之れが修養工夫の結果道德方面が勢力を増し肉体的の方面が服するやうになるのが即ち道德的修養である、之れを肉体からいへば身の爲をそぎて他人の爲にする。是れ即ち人間の道浮世の義理人の踏むべき本分で仕方がなく、修養されて行くのである。この事をさのみ苦に思はないやうになりこの道をよく達したのは聖人君子である。

孔子は十有五にして學に志し三十にして立ち四十にして惑はず六十にして耳順ふ七十にして初めて心の欲する處に従つて則を超えずといはれ初めた。之れによりて孔子が次第次第に最後の處に達せられた跡が明になつて居る。七十になつた時には心の欲する處がその則にづれず、即ち道德法と自然とが全く合したのであります。吾々も道德を修養工夫してこの様になりたいたいものであります。

元良博士が當今精神操練機を作られて低脳兒童の注意散慢なる心を一點に集むる法を實驗せられて居りますが其の結果は多少よい方に向かつて居る。

様でありませぬ、此博士の言に吾人の精神の根本は注意を集めるといふ事にある故に之れを練習しなければなりません。

又人が好色を好むが様に道德を好んでする様にならねばならぬ、善い事であつたらばいやでも何でもする事にしたい、教育者は兒童をこういふ風にする事が出来たらよかるうけれども心は復雜であるからむつかしい事であるといはれました。

孔子様が「心の欲する處に従つて則を超えず」と抑せられたのも此事でありますけれども一般の人はここまでは行かない。どうも苦痛だけれども世の義利で已むを得ないからするといふので、猶それにも及ばないで性慾の欲するまゝを働か、新聞の種ものとなる様に墮落するものであります。どうも人は道德と自然とに衝突が起つて然るのち自然法をためて道德に従つてゆくのであります。此の二方面を有するものは人間であつて他の動物はこのことがなくして肉體の欲するまゝにして居る。

子供も極幼稚の時には少しも道德的訓練が出来て



居ないで自然界にのみ従つて居る。  
然るに子供は將來人間即ち道德界に住む資格のあるものでありますから、道德的方面に適へよといふ意味からして大人しくせよといふことが起つたのであります。

人間の人間たる真面目は道德的行爲者たるものであるから子供に向つて「お前も將來立派になるものであるから早く大人らしくなれ」といふ事からして日本の習慣になつたのであろう。

吾人が人類であることは人間たる本分を發揮せよといふのであろうと思ふ。この點より考へるおとなしくせよといふのは無理でない。おとなしくせねば人らしくならず終る事になるから、父兄は朝夕おとなしくせよと要求するのは尤もであると思ふ。

即ち子供は將來人間即ち道德界に住む資格のあるものでありますから、道德的方面に適へよといふ意味からして大人らしくせよといふ事が起つたのであります。人間の人間たる真面目は道德的行爲者たるものであるから子供に向つてお前も將來立

派になれるものであるから早く大人しくなれといふ事からして日本の習慣になつたものであらう。

處が他の方より考へると、物に一利一害があるのはやむを得ない事で、之れが相對社會の真相である。人間の人間たる所以は道德法の命ずるところに從はねばならぬ。されども余り此事を矢蓋しくいふと社會が形式に流れて精神のぬけたる形ばかりの道德禮儀が行はれて、いはゆる道學先生となるのである。それが道德を思ひすぎたる弊害であつて人前ばかり道德にかなへる形式を行ふ様に實

に一種忌むべき人間が出来る。この様に形式のみ流れたる道德より小供の行ふ處はいくらか動物的でありませうけれども誠に天真爛漫である、この點からしてキリストは嬰兒の如くならずんば天國に入る能はずと仰せられたのであります。キリスト

の生れる前のユダヤ釋迦の出る迄の印度ルーテルの生れる前のローマンカトリックの如き社會は形式の出る前のローマンカトリックの如き社會は形式

主義になつて道德的弊に堪えぬ世であつた。この形式に死んだ社會をいかす爲に改革者が出て該等

嬰兒えいじの如ごとくなれといはれたのであります。嬰兒えいじは天真爛漫てんしんらんまんで心のむかふ處ところに行動こうどうして居ゐる。掬くす可べき所ところを取とつて形式けいしきに中毒ちゆうどくして居ゐる社會しゃかいを救すうため  
に斯ごとくいはれたのであります。此この意味いみからいふ  
と神かみがかかる尊たうとい教きやうを智ち者しやや學がく者しやに與あへないで嬰えい  
兒じに與あへられたのは誠まことに結構けつこうであるキリストが安あん  
息いき日に病人びやうじんをいやしたこれをユダヤ人が見て安あん  
息いき日には仕事しごとをしてはいけなないとモーセの教きやうにある  
のに人ひとをいやす事は宜よろしくないといひました。こ  
の様に安息日あんしつじつの法はふになすんでこの様に瀕死べんしの病人びやうじん  
をも救すふ事をしなはいといふ。此この形式けいしき的てき方面はうめんを破やぶ  
らうとしてキリストが天真爛漫てんしんらんまんなる嬰兒えいじを出いした  
のである。此この様に道德たうてき的に化石かふしした社會しゃかいを救すふ  
爲ために自然主義ぜんぜんしゆぎが稱導しょうどうされたのでルソーが天然てんぜんに  
歸かへれといはれしは歐洲おしやうの教育けいよくの形式けいしきになすんだの  
を救すふ爲ためであるら佛國ふつこくの革命かくめいも形式的けいしきてき社會しゃかいを破やぶ  
らん爲ためであるら。今日のシヨールペンハウエルの哲てい  
學がくも印度いんどうの影響えいぎやうをうけて厭世的えんせいてきの禁慾主義きんよくしゆぎになつ  
たのであろう。キリスト教けいふはもと樂天的らくてきの自由主義じゆうしゆぎ  
ありまして此この教きやうにもとづいて何もかも自由主義じゆうしゆぎ

にかはつた西洋せいしやうの社會しゃかいを救すはんためにシヨールペン  
ハウエルが之これに反對はんたいした説せつを稱導しょうどうした爲ために歡迎げんげいさ  
れたのである。  
露國ろこくのマキシムゴルキーの説せつの迎むかへられたのも今  
日の歐洲社會おしやうしゃかいは貧富ひんふの差さがはげしかつたが爲ためであ  
る。ニールチエーは社會しゃかいの道德たうてきを罵倒ばうちうしつゝしたが  
爲ために歐洲社會おしやうしゃかいに迎むかへられたのである。  
思おもふに私は人間にんげんの生活せいかつは自然界ぜんぜんかい以上の道德界たうてきかいに有あ  
り主張しゆちやうするのである。故ゆへに吾人われらはどこまでも道  
德的たうてきに暮くして人間にんげん本來ほんらんの目的てきどくを眞面目まじめに行やりたい  
けれども、この裏うらにある弊へいは洗あひ去すらねばなら  
ぬ。その清涼劑せいりやうざいとして自然ぜんぜんに返かへつて子供こどもらしくな  
れといふキリストの言げんは時世ときせいに適あつた物ものと思おもひま  
す。私も大人おとなの如ごとく道德たうてき的てきの虚飾きよしきを脱だつして嬰兒えいじの  
如ごとく天真爛漫てんしんらんまんな心こころを失うひたくな。此この心こころを失うは  
ぬ處ところで偉人ゐじんの偉人ゐじんたる面目めんもくがあらはれるのであ  
る。故ゆへに大人おとなにも子供こどもにも二方面にへんがあつて大人おとなの  
子供こどもに優あげられる處ところは道德たうてき的てきにありて之これの裏うらには形  
式しきたる弊害へいがいがあります又また子供こどもは天真爛漫てんしんらんまんで愛あいす可  
きものです悲かなしいかな道德たうてきの觀念くわんねんがあまりませ

ん。其故に子供の悪い所を矯正する爲に大人らしくなれといふ格言が起り大人に對しては形式の道徳を矯めんが爲に小供らしくなれといふのでありませす西洋の child like は子供らしい善い方面で childish は子供くさい乃ち大人氣ないでも云ひませうか兎に角悪い方面である。

乃ち子供らしい信仰は大人になつても何處までも保存しておきたいがチャイルディッシュは惡方面であるから少さい時から取り去らねばならない物であらう。日本の習慣から小供に向つて大人らしくせよといふ事にも眞理があると同時に小供らしい處を去つてはなりませせん。

つまりこの二つの矛盾は全じ物を兩方面から云つたのである。全体日本では子供に對して大人しくせよとなくせよと云ふ爲か早くから老成ぶる様に思はれて面白くない。之は一つの弊害であつて西洋では大人しくせよと云ふ事がなくて大人でも小供と共に運動してオールドボーイの如くなり大さくなつても好んで子供の如く表出を無暗にするために人と別れる時などもオイ〜と泣く様なる

事です。日本では喜怒哀色に表はさずと云ふ事があつて之の點は反對であります、このように社會社會會によつて風俗習慣が異なる結果日本では大人らしくせよといふ事が用ゐられ西洋では小供らしくせよといふ事が用ゐられる。けれどもこの二つの物は決して矛盾する物でない例令は同じ手を見て甲といひ掌といふやうな物である。故に其時期々々に應じて互に其長所は進めて弊に陥らない様にとめねばならぬ。世間では非常に美しき繪を見れば實物のやうだとほめるので、われは即同じ物を兩方面より見たのであります。

要するに人種の異つて居る日本では人を呼ぶにはかいで〜と手で招き西洋ではそれと反對に掌を上に向けて自分の方へ動かして其の形は異つて居るけれども精神に於ては同じなのである。この精神で小供を導いたならば東西洋の粹をぬく事が出来て好結果を得る事と考へます。



### 切貫き細工につきて

藤 五 代 策

切貫細工と云ふは鋏又は小刀にて紙を切貫きて子供の好きな器物の形や動植物の種々の形を切貫くことであります小學校の手工科教材中にも切貫細工と云ふが加へてありますが小學校的の切貫は幾何形を主として之れに種々の紋形などが加へてありますけれどもそれは余程高尚で四五歳位の子供にはとても分らないのみか少しも興味がありませんそこで幼稚園の子供には小學校的のものよりもずつと程度を下げて形はまづくても興味あるものを切貫かせたいのであります。

米國の小學校などでは切貫細工を圖書の一部に加へて居る様でありますが夫れは何故に手工の仕事と圖書を同一視して居るかと云ふにぞ承知の通り圖書は鉛筆又は毛筆にて紙面に様々の形を描寫するのですが此の切貫細工は鉛筆又は毛筆に換ゆる

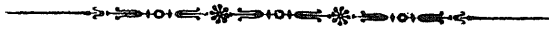
に鋏又は小刀を以てしたのと一ツは紙面に様々の形を描寫するのを切貫細工では全然其の形を切貫くのであるから圖書と切貫細工とは其の働か方が余程似て居るのでありますそこで切貫細工を圖書の一部に加へたものかと思はれます

次に切貫細工の用具と材料とにつきて申上げます先づ用具としては小形の唐鋏が必要であります之れは握り鋏でも用は濟みますけれども握鋏は使用し難いのと其の手入れに困難しますから直段は少し高くなりませけれども唐鋏を用ひさしたいのであります

小刀には諸刃片刃など其用途に由て色々ありますけれども切貫細工には先づ小形の切出し小刀が最も便利であります此の小刀は鋏で切貫くことの出来ない處を截ち板の上にて切貫くに用ふるものであります

截板は朴か杏の様な軟かな材で年輪の凸起せないものが最適してをります長さ六寸幅四寸厚さ三分位の板ならば結構です

材料としては畫用紙を用ひますが余り薄き紙やホ



紙の様に厚い紙も困まるが此の書用紙ならば作業の上にも都合がよく鉄などの切れ味もよいから初步の内は書用紙を用ひさせますが稍進歩しますと清帳紙や美濃紙を色染めた色紙を用ひさすのです色紙を用ひますと形と同時に色の觀念が授けられ且美的の感が與へられますから子供は此の色紙を殊の外喜びます

臺紙は書用紙の稍厚いので結構であります只に形を切貫いたのみでは何だか物足らぬ心地がせられ又皺が生じたり切れ離れたり或は紛失したりしますから其の切貫いた形は適當な臺紙に貼りつけますと一層面白く見えます

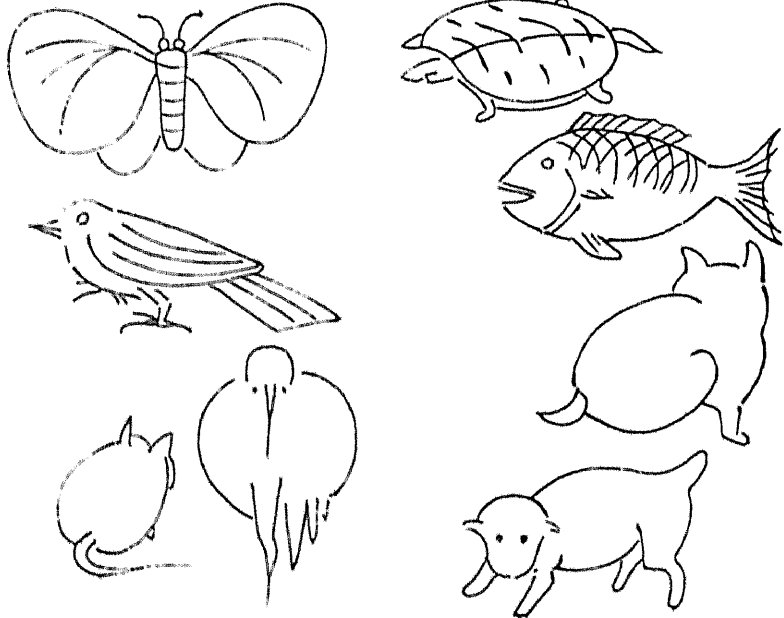
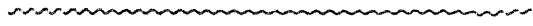
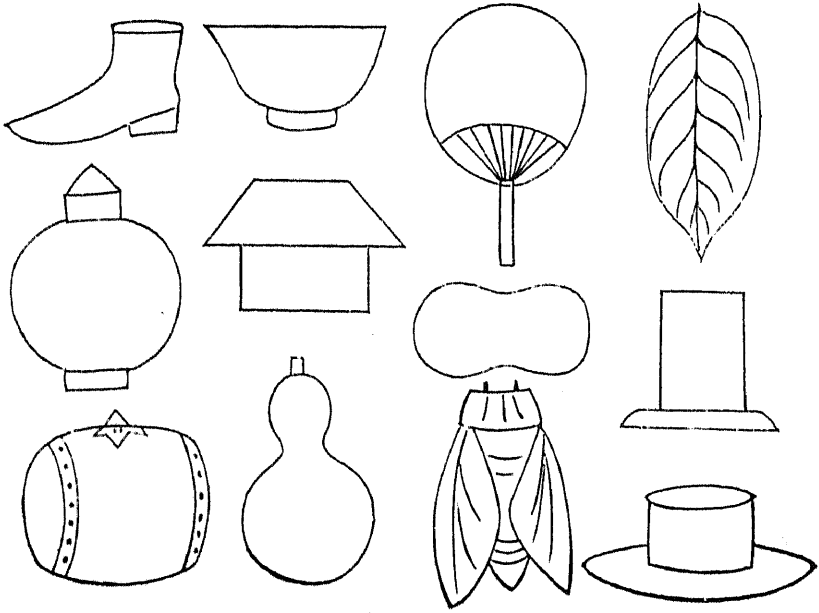
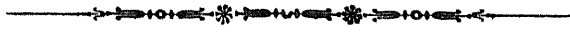
糊は生熟糊の極めて淡く練つたものが使用に便利であります濃くすぎるとは貼り付けた後に臺紙を釣り屈める患もあれば皺のよることもあります

此の外に鉛筆と護謨とを持たしめて切貫く形の大鉢を畫かしめかくこともあり又は切り貫いた形に動物ならば目口を描かしめ器物ならば必要の線丈け入れしむることがあります

次に作業の方法に付きてお話しします

切貫くべき形は最簡短にして子供の常に目撃する併かも興味を以て迎ふる器物や動植物の形でなければならぬ且又切貫くべき箇所は成るべく形の周邊を切り貫きて内部は極めて切貫かすにすむ様な形がよい之れと同時に其の形は一纏りになつてばらばらに切れ離れぬ者が望みたいのであります斯く形の上に要求したならば其の要求の範圍内にて子供に種々の形をよく見させて形を正しく看取る習慣を養ふのです次に其の形は如何に影に映ずるかを實驗するのであります

是れは最秩序ある方法でありますが常には子供の心に浮んだものを氣儘まに鉄にて切り貫かすのであるが多くの子供の内には中々巧みで大人でも及ばぬ様な成績を見ることがあります斯く出来たものは臺紙に貼り付け尙鉛筆を用ふる個所あらば



隨意まかせに描かかすのでありませう  
次に切貫きりぬかすべき形かたちの一般はんぱんを描かかせせう

幼兒教育雜感

白山生



一、頑迷なる教育

明治の初年より今日に至る迄我國の教育は其理論に於ても其方法に於ても將た又法制の上にて幾數偏の變遷をして今日に至つたので之を夫々當初の輸入時代に比べて見ると何れも驚くばかりの變化發達をして居るのであるが獨り最も頑迷で、そして餘り發達をして居ないのは我幼兒教育であると思ふ。何故と云ふに我國教育の特徴として小学校其他の教育は全國何れの地方へ行つても一定の理論が立てられ一定の方法が施されて居る。尠くも我國に輸入されたものは其獨式たると佛式たると英たると米であることに論なく頓がては渾然融和せられて統一した一定の主義方針のみに全國劃一的に施行されるものであるが獨り我幼兒教育の

みは未だに我國輸入當時の保育法其儘で餘り進歩して居ないのがあるかと思ふと一方には純米國式で米國の現状を其儘移植することに努めて居るのがある。何れも其頑迷なことはお話しにならない位で唯もをフレール其人が神様でいもあるかの様に考へて居る類の人が若しくはフレールの神秘的な保育論を一派の教育即ち宗教々々に利用し様とする類の人で進歩とか發達とかには餘り熱心でない人々で頑迷の度に於ては等しく度しがたい方である。處が是にも増して度しがたい類の人がある夫れは、何々の主義とか、斯く／＼の方針とか云ふ一旗幟を立て、一方に割據して他を睥睨して居る類の人で、是等の人々に遇ふと其眞意氣の荒いこと實に凄まじいもので大抵なものは吹飛ばされてしまひさうである。夫れも研究的に吾人は斯く々々の實驗を得たとか、或は斯く々々の新思想を得たとか云ふて教へて呉れるならば眞意氣の荒いのも決して困りはしないが、道理も理屈もわかるものか心理學の講義は心理學者に聞け、教育學理は教育學書にある。吾等は單に吾等の主義を

主張するので是即ち吾等の特色、吾等の長所で、  
以て他を睥睨す可く、以て他を輕侮す可しと云ふ  
様なことでは誠に我幼児教育界の爲めに慨せざる  
を得ない。

幼児教育も同じ教育の中である以上は幼児教育上  
の一事一件は悉く何等かの原理法則を有するに  
違ひなく而して之等の原理や原則は決して一個人  
の私有す可きものでなく廣く科學上の成果物とし  
て等しく万人の其利益を享有す可きものであらう  
と思ふ。従つて問ふ人あらば己れの採る所の主義  
主張は快く教示して以て後進の誘掖に資す可く  
以て同人の研究に資す可きである。然るに我國の  
幼稚園教育は不幸にして斯る割據的人々が其處此  
處に居る。そして各其採る所を固執して毫も科  
學的研究と云ふことをしない斯る有様では我幼稚  
園教育は如何にして進歩す可きか又全國數派に分  
れて居る此幼稚園教育は果して何時になつて統一  
することが出来るであらうか。誠に慨嘆す可き限  
りである。

二、幼児教育の根本的改良

積木の數を加減したり、恩物の一つ二つを加除し  
たりすることも改良には違ひないが斯んな姑息な  
改良は何れだけの効果があらうか、勿論効果のな  
いことはないが是よりも一層有益で一層急務なの  
は幼児教育の根本より其法則を組立つることであ  
る。否組立替をするのである。

フレーベルの學說尊きことは尊きに違ひないが是  
を其儘今日に行ふとしては餘りに神秘的で餘りに  
非科學的である。フ氏の言論は大に吾人に教ゆる  
所が多いけれども去りとして是のみを以て満足する  
には少し不充分である。是は決して單に吾人の自  
負ではない。今日の教育家恐らくは悉く皆斯る  
思想を持つて居るであらうと思ふ。既にフ氏の教  
育説が今日に於て改造される必要があるとしたな  
らば之が完全なる組立は吾人幼児教育に與るもの  
任務ではあるまいか、幼児教育の根本的改良が  
出來れば従つて其從屬的副次的改良は自然になさ  
れるに相違なく、從來諸方より蒙つた幼稚園教育  
非難の聲も自ら消滅する筈であるが是が充分に達  
せられぬ中は幼稚園攻撃の聲は何時迄も續くに違



ひないと思ふ。

### 三、現在教育學の不備

幼兒教育の根本的改良は右の様々に其理論的方面の組織換に因らなければならぬが此根本的理論の組織は教育學の責任であり、教育學者の責任である。現在の様に保育法と云ふものが教育學の範圍外に獨立して怪しげな理論や不統一な寄木細工然たる理論を據どころとして暗中物を探ぐる様な教育の仕方して居つたのでは何時の時に幼兒教育の改良が出来やうか誠に概はしい次第である。併し是も詮ずる所現在の教育學が不精不備で幼兒教育の方法を指示することが精しくないからであると云はねばならぬ。従つて今日の教育學者たるものが此方面に向つての研究に力を致すことが充分でない結果であると云つても決して過言ではあるまいと思ふ。斯う考へて見ると思ひ出すことがある。今となると一昨年の暮であるが京都大學の谷本博士は明治四十年を以て幼稚園に關する教育説の解決せらるゝ時期であると云はれたが其明治四十年は

首尾よく舊臘を以て終を告げて今茲に明治四十一年の新春を迎へることゝなつたが初て舊年中に如何なる解決を見たかと云ふに唯同博士が一回京坂神聯合保育會に於て幼稚園不必要の演説があつたばかりで別に之と云ふ解決を見ると云ふ譯には行かなかつた。斯様にして幼兒教育と云ふものが今日の教育學者の眼から逸して居る間は幼兒教育は決して發展す可きものでない。幼兒教育の理論は何時になつたら教育學の中に説かれるであらうか俟ちどうしい次第である。

### 四、小學校と幼稚園

博士や學者と云はれる人々の側からは幼稚園の必要は單に貧民救助と云ふ社會政策上からのものとされて居るに拘らず地方の小學校の教員中には往々幼稚園に關して多大の興味を持つて居る人があつて漸次此方面の教育が研究される様になり或は其學校に附設の幼稚園を設け様として居るのを見る様になつたのは誠に喜ばしい現象である。斯くして幼兒教育は實地に研究され、實際に普及す

る様になれば我國の普通教育は間然する所なく行はるゝものと云ふことが出来、教育學は實地の方面より改良を強いられる様になるであらう。是は頗る快心な事である。吾人は斯る状態の一日も早く來らんことを切望して止まぬのである。

### 五、幼兒教育者と教育學

以上述べるところで吾人は主として現在の教育學者を攻撃したが併し罪は是ばかりでなく幼兒教育者其人の方にもあると思ふ。余輩の狭き經驗の範圍では幼兒教育に興る人で常に教育學書を播いて居る人と云ふものは極めて稀である様だ。若し果して是が一般の實狀であるならば我國幼兒教育の進歩せざる理由の一半は此方でも其責任を負はなければなるまいと思ふ。幼兒教育も教育事業の中である以上は教育學の理論は謹んで服膺しなければならず又教育學の理論に反した教育法は幼兒教育であるからして赦さる可き筈がないから何の道教育學は幼兒教育上の規準とならなければならぬ。従つて幼兒教育者は常に教育の原理に就いて考へ

て居なければならぬ。決して一部の保育法のみを以て満足す可きものではないのである。人或は保育法を以て一種特別な教育法の様に思ふて居るかも知れんが決して左様のものではなくて矢張一般教育中のものたることは間違ひなことである。唯之を幼兒に實施するに當つて特別な技術を要するところが普通の小學校教師と幼稚園保姆との差別を生ぜしめる次第である。

### ▲一錢かニツケルか

余の紐青に在るや、友を訪はんとし、一男兒に問ふに路を以てす、彼れは懇切に教へたり更に彼れに問ふ『どうだ己れと一處に行かぬか』彼れ答へて曰く『一仙かニツケルか』ウソ五仙だ』彼れ狂喜して曰く『君よ、僕は行くよ』二三の兒童忽ち之を聞きつけ『己れも行く、五仙呉れるん』余は宛も是れ鬼ヶ島征伐、桃太郎といふ位置に立てり『一人て澤山だ』とて、前の一兒を伴ふて歩を進むれば、數兒ぞろぞろと追尾し來り『五仙呉れ』ニツケル呉れ』と叫びて已まず、遂に余が友人の住へる家の前まで、叫びつゝ來れり、其根氣の強き、實に驚くに堪へたり

保母となりし最初の一週  
間 (承前)

十一月五日 火曜日 雨天

観察事實 午前八時半出席しました。幼児はもゝ来て居て、先生御早うと挨拶しました。一日のこゝとで顔を覺えたのかと、實に驚きました。幼児だからとてなかく／＼にあなどれぬもの哉。よく小供は鼠の様なものだと思しませんが、保母たるものは大理石に彫刻する決心を以て一撃一槌でも忽には出来ぬことをふかく覺悟して、この感受力の強い幼児に對さねばならぬと思はれました。それから遊戯室で鬼事をしました。小供は案外に体力も進んで居ると見えまして、いくらでも續けて居ます。轉んでも少々他人と衝突しても平氣であります。見て居る自分が冷汗を流して泣きはせぬかと心配しましたか、全く無用でありました。そんな心配するよりも鬼になつてやつた方がよほど幼児の興味を増させるのであることを悟りましたから。随分走り廻りましたが、大分つらひものであ

ります。身体が弱くは勿論駄目でせうが、餘り肥満して居るのも保母としてはよろしくない様に考へます。

飛蝶の様に飛び狂つて居つた幼児が、鐘の一聲で一生命にか室へ走つて行きまされたので、一寸吃驚しました。これか即先生の御訓練の然らしむる所とやら／＼氣がついて遂には自分等の平生か恥しくなりました。子供は教師の教師なりとはよく云つた言葉であると同時に、小供は教師の反影である。は千古の金言であるとふかく感じました。

會集後にお室で發聲の練習がありました。耳がよく發達して居るので又々一驚を喫しました。外遊か出来ぬために室内で繪草紙を見せてやりましたが、一般に靜的の繪よりも動的の繪が氣に入る様であります。人が居てもたゞ立つたり坐つたりして居るのみでは眼もくれずに次を見んといふ。軍をして居る所とか御話をして居る所とか獵をして居る處とか關係的活動を表はしたものは大喜して、いろ／＼發問する様であります。これ即幼児

の活動性の然らしむる所かと思はれます。  
 ○○捨子金子○○の兩兒は最も早くわいた様子  
 で席て立つて悪戯をして居りました。島山と小林  
 桐島の三兒はいつまでも興かつて居ります。之の  
 發問などより見ると連想が随分發達して居る様で  
 あります。  
 實習科の方の唱歌がありました。よく慣れて居ら  
 れることが薄々なから見える様になりました。板  
 排への時に有坂がよほと興かちりましたから、何か  
 一番好きかと尋ねますと板排でありますと答へま  
 した。その製作物は四種もありました。島山は第  
 一番にわいて後いいてあくびをして居ました。何  
 故かと聞けば無言のままさまり悪るそうに下を向  
 いてしまつた。氣が弱いからいやになつたと明言  
 し得ないのだと推察しましたから、下の如くに云  
 つてやりました。あなたは早く出來上りましたか  
 ら、中島愛子さんの御手傳ひをしてあげて下さい  
 と。それか轉氣になつたのかよく丁寧に世話をし  
 て橋を二人で作りました。中島愛子は形態上  
 の思想がよほど幼稚らしい小林は最も複雑なる形

體を作り出した。金子は桐島にかはつて自分のも  
 のは二つしか作りませんでした注意を一點に集め  
 ることが出來ぬらしい。放課後遊戯の教授を受け  
 ました。  
 所感 幼兒につきてはなか／＼あなどれぬものて  
 ある。身心共に充分なる潛勢力を持つて居る割合  
 に強いものであると思はれました。殊に著しき  
 性質は活動して寸時も止まることが出來ず、從つ  
 て變化を好み等閑を嫌ふことであると考へます。  
 自分は從來カントの認識論やソクラテス流の世界  
 觀人世觀が好きでありました。又無意識ながら  
 その立論に適する様な生活をして來ましたから、  
 フレーベル先生の人間論は人性の一面の眞理をあ  
 げて居るのみとしか受取れませんでした。  
 フレーベル先生の哲學思想はよほど神秘的であり  
 ますから、夏休暇に原語の拾ひ讀みをした位では、  
 了解出來様筈はありませんが、まゝ大體をとりつ  
 まめば、人間の本性は決して認識にあらす活動な  
 りといふ一句に歸する様であります。人は知らん  
 とするよりも寧ろ行はんとするものであるとのこ

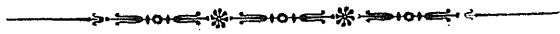
の根本思想は先生の教育の根底となり幼稚園保育の基礎となり恩物作業の起る所以であるらしい様です。

今度幼児に接して見ますと、これが如何にもと思はれました。幼児には好奇心がありまして事物を知らんといたしますが、その認識のしかたが大人のそれと大に異つて居ます。自分が受身になつて静かに知るのではなくそれ等の事物を材料として充滿せる活動力を使用せんために認識をするのであります。故に幼児の認識は主観か主であつて客観は單に主観のために使役せらるゝに止まつて居ます様であります。これ等の事實より歸納して見ますとフレーベル先生の御説は小くも幼児に對しては眞理であるかと合點せねばなりません。幼児からその活動を除き去れば、如何に營養物を供給しても、衣服住居を完全にしても、玩具を山の様に積み立てても、幼児の生活は保つことが出来ぬかと思はれます。畢竟其食物などは幼児の活動する勢力を興へる必要品であるのみで御座います。衣服住居はその活動状態を保護助成する道具である

のみ、弄具は幼児の潜勢力を活動に誘導するためのものであります。目的は活動にあるのであります。又活動は幼児の生活の目的物なると同時に、幼児發達の手段であります。走しり廻り飛び狂つて居る中に、その身心を發達せしめて人となるのであります。故にこれ等を概括して見ますと、幼児の生命は活動にありといはれます、幼児があき易い性質もよほどの活動性と關係して居るならんと思はれます。即單調な刺戟は活動力を多く使用することが出来ませぬ又同じ刺戟が永續しますとそれに對する幼児の活動力は時間に逆比例して減します處から、幼児は兎角變化を喜び等閑を忌避するのではなからうかと思ひますが心理學を知りませんから間違ひかも知れませぬ。(?)この呼吸をよくく呑み込んで置きませぬと、不慣れてありますから手杖の時には随分失敗をなし易いのであります。幼稚園敎生として勉むべき事は澤山あり技術としての練習も多く遣らねばなりません。いか、要するにそれ等の歸する所はこの呼吸を覺えるにあること、存じます。

十一月六日 水曜日 晴天 但し空寒く風は強し  
 観察事實 氣候のせいかな鼻汗を出し 居るものを  
 初めて見ました。しかし元氣は旺盛でありました。  
 子供は風の子とはよく云つた言葉であります。小  
 山の上から風の吹く方向に走り降りて平氣で居り  
 ました。中には汗を額ににじまして居るのもあり  
 ます。幼児が走るときには大抵口を開いて居る様  
 でございますが、そのまゝで風に向つて走らすこ  
 とは喉頭鼻腔の衛生にはよろしくない様だと思ひ  
 まして、砂場へつれて行きました。口を結んで走  
 る様に訓練したきものなりと考へました。砂いじ  
 りは男女兒共に好む様子で御座います。ヘルバル  
 トの文明的的階段とやらの筆方で説明しますと、  
 今幼兒等は吾々祖先の土焼きを工夫したので繰返  
 して居ると云はねはなりません、人類か陶器を  
 焼く時代は石器時代よりも進歩して居るのたと聞  
 くからには、この幼兒も大分進歩發達して居るの  
 であるかと思つて居る中に會集の鐘かなりまし  
 た。外遊になりますと女兒三人男兒一人か手や袖  
 を引張つて藤棚の下へつれて行きました。落ちた

る藤の葉柄を捨ててゲジ／＼や籠を編んでやりま  
 した。女兒は一心に手技か上手で又好む様であり  
 ます。中には自分で作らんと努力するものもあり  
 ましたがゲジ／＼の足二本を作り上げたのみで、  
 それより後は同一の方法を反復すればよいのに思  
 想か混亂すると思えまして誰一人も全体を編み上  
 けることをしませんでした。それから實習科の方  
 の談話と箸環を拜見しました。談話はよほど成功  
 せられたかと思はれます。先づお話しぶりが老婆  
 的でお言葉が幼兒的で調子がよほど實際的で喜の  
 時には喜のお聲を悲の時には悲のお聲を使はれ  
 て、事實そのまゝを寫されました時には手話も表  
 情的態度も用ひられよく幼兒固有の言語習慣を吞  
 みこんで居られた上に話の進行が具象的でありま  
 した。例へば或る田舎の小山といふ代り道灌山云  
 々といはれました。一体幼兒といふものは時間空  
 間の觀念が至つて發達して居りませぬから、それ  
 に話す談話なども時間空間の制限をはなれてアル  
 時アル田舎といふ風にいふ方が幼兒の想像を自由  
 に働かせ興味を起させるを大なりといふ説を聞い



た事かあります、これは昔の類に適當であつて、昔々ある處等の類語か幼児を導いて過去人類の思想に到達せしむるに効がありませうか、今日の教材の様に衆のお話をされるには如何にしても今日せられたごとく時間空間を實際的に具象的にやつてはしいものかと存します。

所感 幼稚園の建物とその周圍につきて  
幼稚園の建物は實に頑丈に出來ております壁でも大した厚さであります。即堅牢美をそなへて居ます。それが幼児の身心に大なる良影響を及ぼすことと存します。壁の厚さといふものかよほど室内の氣温調節に關係ある所で御座いますから、東京の様に氣候が急變し易い所では是非あの様な厚さの壁を持つて居る幼稚園が必要かと思はれます。又頑丈な建物の中に居りますと自然にしっかりとした落付いた氣性になるもので、風ふけば飛ぶといふ様な建物は如何にしても輕々しい品性を作る様です、ひが目かは知りませんが東京市中央の家は地方のより頑丈でなく云はいキャシャに出來て居る様で御座いますから。幼稚園か堅牢である

ことは一層よろこばしいかと思ひます。それから堅牢であると美的なのであります。破損や修繕が多くて壁や天井などが新舊色を異にして戸の開け閉ぢも自由でないといふ家屋では、清潔にしたり裝飾するの勇氣が出ません。幼稚園か古色を帯ひて泰然自若として居るのはよほど意味深いものかと思ひました。又幼稚園は堅牢美の外に質素美清潔美を持つて居ます。

か室へ行きますと學校では決して見ることの出來ない様な、額や圖畫や花や保育用具を秩序正しく澤山飾つてあります。その飾りかたか幼児らしく實に淡白で單調で明瞭で清潔であります。繪畫などはよく解りませんが、純粹の美を表はし肺病的美術や神經病的の美は一寸入れてない様です。臙体の美術なども近頃は流行する様ですか、幼稚園では一切明瞭体の畫をかけてあります。それから浮世繪の代りに歴史畫を用ひ骨董的盆栽の代りに自然の挿花を持つて居ります。

春風の良感化を興へるには此の様に無意識的的境遇を作らねばならぬことと存じます。

次に周圍につきて申して見ますと、まづ道路に接した方には随分高い澤山の常緑樹があります。文明のお蔭で電車や車の音がガタ／＼チン／＼と實にやかましい此の處では、子供が大變イラツ様になつて、神経を痛め易いと思はれますから、落付きのある常緑樹を周圍に澤山植えてゐることは甚たよろこばしいことゝ存します。それは外來の塵を防ぐことか出來ます上に、いろ／＼の鳥も來ますから、自然に近くなつて幼稚園保育の目的に適ふ様で御座います。それから眼のためにも甚たよろしい近頃は壁色の研究もやかましく間色の中でも緑が第一だといつて居る人もあります。それで常緑樹をなほ澤山植てほしいと存じます。それから庭も廣う御座いまして、山もあれば花壇もあり砂ほり場もあれば鶏小舎もあり小石もあれば草もあるといふ風で、まことに結構であります。今日も鶏の白いのが頭をつゝかれて居たのを幼児が見てよほど同情を起した様であります。これ等の設備は皆幼児の誘導に資するのでありますから、なほ完全にしてほしいもので御座います。

例へば自由園を多くして幼児勝手に草花を植えることの出来る様にし池も作つて魚を入れてほしいものです。ヘルバルトの文化史的階級の説明を待たなくとも幼児は實際草を植へたり舟を弄具にしたり魚を捕つたりすることは大に喜ぶものです。私の経験によりますと幼時には船が一番好きでお庭の泉水へかまぼこ板の舟を浮べて遊ひましたのか第一に樂う御座いました。水遊びも大好でありました。幼児には骨蕙的美術心の發達して居る筈はありませんが、無邪氣な美術心はよく發達して居ると見えて、割合に見分をつけます。故にわれ等教生も大にその點に注意すべきかと心附きました。幼稚園には土佐派流の松なけれど廣い芝生があつて蓮花草も嫁菜もすみれもその中に咲いてその上で坐せたり走らせたりしたいものなり小石の布きたる所では轉ふとすりむく恐れかわりません。今日も中島愛子が輕傷しました。幼児と美に關しては次の注意も必要である様に思ひます。教生は風彩や音聲や顔付を美ふして愛嬌の自然表出法などを研究してもよい。と



狸學と文學

川口孫治郎

狸は、面壁三年、化けるなら達磨か少くとも大入道とうつて出やうといふ。狐に比しては男性的である。機嫌のよい時は、所謂面白狸の腹鼓を打つて、月の夜にあこがる。風流漢である。併し狐に比べては、總計に於て、何處にか少しノロいところがある、それ丈又一方に可愛のところが多い。世人は、一本繩で馭へない男に、兎もすれば古狸とアダ名をつくるが、狸はさう煮ても焼いても食へないほど性質の鍛い上げられたヤンチャンではない。誠にやさしいところのあるものである。但し獸の序であるから一寸いつておくが、彼の肉は異臭があつて、昔の皮商賣をして居つた人々でもあまり好まないといふ噂である。彼の種族の中で「シバオリ」といふものが、穴居のみの狸よりは皮が上等である。共に日本の昔の鍛冶の鞆の中の空氣を吸引し及び吐出する唯一の大きな瓣に専用せられて居つた。毛は現今でも筆の毛として重せられ

て居る。彼を御承知ない方々は、彼が「ソマトーゼ」とかいふものを呑んで十倍強になつたものが、熊の出来損いであると想定すれば、大した間違は一寸ない。顔付などは何處か親類でありさうにも見ゆる。

比古兵衛さんといふのは、吾輩の隣村の朴直な昔氣質の善い百姓の老爺であつた。彦兵衛爺の頭には、殘んの雪を戴いて、其端に小やかな丁髷が、蜻蜒や何の味ある壺の先といふ風情で、後の方、左に斜にそり返つて居つた。何時も、淺黄の褪せた短かい仕事着の下に、膝頭の抜けて脛までの同じ色の股引を穿いて、ドンヨリとした水色の處々ほつれかけた帯が環のまゝ、將に脱して脚下に落ちんとして辛うして臍骨に支へられ、其結瘤が總をなして後方にブラ下つて居る、其意氣なところは今の東京の書生どもがやつて居るものゝ最もハイカラなるものにも匹敵すべくあつた。但し爺さん自身はそれが高襟なるか蠻襟なるか、扱は中庸襟なるかを少しも知らない、唯それが彼の常習であつたのである。

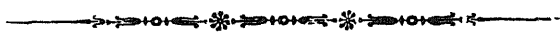
鳥は鳴かぬ日はあつても爺さんの働さに外出しない日はなかつた。仕事の仕振は頗る優長であるけれども、確に勤勉家であつた。

其外出するには何時も、夜明け染といつて、白木棉の端を角から一寸田舎紺屋の藍壺に浸けて、早速引上げて水で洗つて、青い角から漸次に白くして白いとところに夜明けと名のついた其手拭の從來幾多の寒暑を凌ぎ来りしものを、いとゆるやかに鉢巻に試み、ヤオラ身を起さんとするに當り、腰なる「火の用心」としるされた油合羽の煙草入から、指頭に今一服を摘み出して、其眞黒な處々眞鍮の磨れ光のする煙管につめて、爪先の處に細い煙を上げて居つた前の吸殻を押しひつつけて、スバ／＼二三度吹かした上で、口の隅から斜左前下へつき出すべくくわへ、茲に始めて傍なる手頃の鍬を突張つて立上がり、頓がて之を右の肩にして其柄を端近く全腕の中頃で押へて三十五度の角度を保ちて支ふべく手首は自然のまゝにうなたれて居る。之が彼の常例であつた。

師走の未つ方、外よりは内の忙はしい押迫つた廿

六日といふに、彦爺相變らず山田山畑の見廻りに出懸けて、頓がてそろ／＼家路に廻り歸らうとする、未だ入日が少し東の山の巔にのこつて照して居る頃、山裾の深い小溝の涸れてしまつて今は唯落葉のみ溜つて居る中と、恰度此方彦爺の行く手に向ひて、黒褐色のムク／＼太つたものが、やつてくる。悠揚迫らざる爺も、オヤツと氣がついて、常には似合はぬ敏捷に、細き其深溝を跨いで、肩なる鍬を、大上段に構へた。凝然たる其風、巖乎たる其態、蓋し天下の壯觀の一であらう。少くとも彼は第二十世紀の動物學者の一人たる資格があつたのである。

之は、狸や蝮などが未だ氣付かぬ前に、人が逸早く彼等を認めて、不動盤石の姿勢態度で、眼に我から霞を被ぶせて立つて居れば、彼等の眼は俗稱「ハリ附け目」といつて、人の待ち構まへて居るのも知らず、ズン／＼此方にやつてくる、踏み付けるるゝまでもやつてくる。唯それまでに常人は辛棒しきれなくて、身動をするとか、殊に睛をチラと動かすとかするものであるから、中途彼等に



氣附かるるのみで、此方だに此要領を呑み込んで居れば、盡く此方の所有になるのである。といふことを、彼彦爺は夙に了知して居つたからである。但し彼のは傳聞であつて、實驗をやるのが今度が、生來始めてゐたらしい。

愈、狸が間近くやつて来た、無念無想で待構へて居つた彼爺も、此一撃に、其丈夫な狸が、我物と思へばうれし、鉞の先、思はずブル〜と震つて、驚喜の凝つた大喝一聲、柄も折れよと許に打下した。

但、あまり力が入りかぎて、大切の鉞が溝の片側にぶつ附かつて、大カブリを躍つて振つた丈で、肝腎要めの狸には、砂の飛走りがかゝつたまでで、何の打撃もなかつたのである。併し狸は早や首を西方浄土の方にして往生して居る。

思ふこと儘になるもならぬも此世の習、と淡く悟つた六十六の今年まで、はんとうに思ふ通りにいつたことが唯これ一つ。枯木の如き彦爺も、此時ばかりは顔色春めいて見えた。餘程うれしかつたと見ゆる。

うれしい時や、悲しい時には、智者にも千慮の一失、古今東西の歴史を繙く毎に、切に此感を深くする。

あはれ彦爺も、此大功名の現状を誰かに見てもらいたい、のであつた。日は早や没つてしまつた。やう〜七八町向ふを歸り行く樵夫が一人おぼろに見ゆる。彦爺、早速に呼かけて、  
「おーい、狸をとつたぞー、来て見んかー」と嘯いた。

何か異變でもあつたかと、心配げに、樵夫が折返して来て、聞けば、狸一匹とつた、といふ丈の話。扱、その實物はと見ると、丸で影もない。怒るまいことか、根が正直な單純な田舎者であるから、樵夫の此時の憤慨といつたら、殆んど類例を見ない位のものであつた。

「従兄弟同志の己れを、心配させて茲まで駆けて来てみれば、ありもしない狸をとつたなど」と小言をいふ、彦爺も頗る狼狽で、唯「あつたのだ」、「此に轉がつて仆れて居つたのだ」などと頻りに申譯と失望と不思議と残念とに、今在つたのに

く、と繰り返してばかり居つた。  
 怒つぽい丈に、なほりも早い、樵夫にも彦爺のウ  
 ロたへて居る有様の偽ならぬが感應したものと見  
 え、「オイ彦さん一處に歸らう！お前は有りもしな  
 い狸か何どにつまゝれ、おれは又お前に一寸つま  
 めれたわけだね！何うでもない、や！とサラリと  
 一笑に附し去つた、彦爺をつれて共々に歸つて來  
 た頃は、日がもうズンブリと暮れて居つた。思ひ  
 切りのよい彦爺も此途中で「どうも確に僞れて居  
 たのに」とくりかへし 内へ歸つてからも、尙ほ  
 其氣色が揚らず切に獨りで殘念がつて居つた。  
 翌日之を聽いて、吾輩は切齒扼腕憤慨した。吾輩  
 は憤慨といふことをあまり好まない、又それをや  
 る丈の必要を認めたことは今日まで殆んどなかつ  
 た。唯此時丈は、非常に憤慨した、彦爺が可愛想  
 で、其胸中の遺憾を察して、氣の毒のあまり、吾  
 輩の生涯中に空前であり絶後なるべき憤慨を、今  
 からのいへば早や十五六年前にやつてしまつた。今  
 考ふれば、彦爺も可愛いし、狸も可愛いのである  
 が、當時は唯もう彦爺にのみ、多大の同情を賤い

て居つたのである。是に於てか吾輩は斷乎として、  
 狸を生擒すべき作戰計畫に肝膽を砕くことになつ  
 たのである。  
 丁度用事があつて二週間計滞在することになつた  
 駒場出の農學をやつた親類のものが、滞在中に、  
 中學校に持つて歸る標本を漁獵つて居ることを、  
 耳にしたから、早速此方から、狸狩りの申込みを  
 した。彼も「貴様の熱心は頼母しい」などと頻り  
 に我輩を誠しやかにおだて、居つた。何しろ彼は  
 三十近い男、此方は其半分の小供、併し毎日連れ  
 だつて、あさつて歩いた。彼が求むるところは、  
 何でも來いといふ廣い意味の採集であるが、我輩  
 の求むるところは、唯彼彦爺の爲に、恥を雪ぎ、  
 奇麗に復讐をしやうといふ一念のみであつたので  
 ある。  
 二週間中、一度ちらと彼狸の影を認めたが、彼は  
 我より逸早氣づいて逃げてしまつた。併し天は我  
 輩の義心を認めしものか、農學士先生明日は愈歸  
 任するといふ其前の夕方、即ち最後の獵の歸り路  
 に於て、端なくも、我輩は我輩のつけ狙つて居つ

た當の仇、狸公を町餘の彼方、蜜柑畑の石垣の下に認めたのである。我輩は農學士君の袖を曳いた。彼、「一發で留めて見せる！」といつて銃を擬せんとした。我輩は其銃身を押さへ止めさせた。今でこそ一介の野武士の果、我等の祖先に、若し時の有司の私曲を容るゝ能はざりし潔癖なかりしならば、我等は今日堂々たる世襲武士とあるべきもの、世が世なりとも魂は依然として武士ではないか、武士は容易に刀を抜かない、容易に發砲しない、それが武士道である、射撃道である。我輩は彼狸を生捕りにしやう、とたしなめた。農學士の從兄、ニツと笑つて、「誰がそんな小理屈を貴様に教へた、生意氣なことをいふ、」といつて、「然らばドウして生捕る」と我輩に反問した。

吾輩の意見は、素敵にふどかして狸の度膽をひつこ抜いてしまはう、といふにあつた。

從兄は然らばと、藥笈の先から彈丸を拔らとつて空砲を狸の眞の意外に被ぶせんとした。吾輩は復た、之を遮つた。狸も鐵砲の音を聞いては如何程度膽が抜け腰骨が外づれても一生懸命で逃げてし

まう。負傷してさへ然うだ、況んや空砲をやである。狸を馬鹿にしては此方が馬鹿である。文明の武器は今の狸も知つて居る。今の聰明な狸に對するには頗る太古的方法がある、其策はシカウカウカウと説明したが、茲に至つて從兄め、クス／＼笑ひ出した。我輩は三たび彼をたしなめた、獲物は早や眼前に來さうになつて居るに、笑うとは何事だ。

「已れは明日歸校するから、貴様には復一寸遇へない、今日は何事も貴様のいふ通りにしてやる」と彼從兄め、全く我輩の意見通り、可笑しさを我慢して顔をしかめながら、石垣の角を先廻りして、狸の廻り來るを待ち受けて居る。愈、狸此角を廻つた其一轉瞬、聲山谷に震ふともいひたい大喝一聲、「タヌ公、來たか。」コロリと僵れた。

ハハ……成程仆れた、「オーイ君來たまへ」とよぶから、吾輩は「そこを押しへる」と注意を與へつゝ走り寄つて、二人で用意の麻繩を取り出して、狸が突然の驚きに擬死して居るのを、首の左側から右の腋下にかけて縛しめて、其繩を引

張つて彼を歩かしてつれ歸らうとしたが、狸飽くまで死んで居る。併し突然に嚙み付かれないやうに用心しながら其腹をみると可笑しいことには、呼吸をするにつれて鼓動がして居るから彼は矢張所謂狸を極めて居ることがわかる。

仕方がないから、畑の竹塙の棒を引抜いて、真中にブラ下げて、二人でかづいて歸つて、獸圈に入れてやつたが、狸まだ死んだ態をして居る。併し此方は彦兵衛さんのやうに決して油断をしないから、何とも逃げ出しやうもない。加之此方から牛肉の御馳走を差上げておいたのだから、多少はづかしがつたと思え、到頭其夜の十時、家の一同が就寝する時まで、まだ死んだ態で寝て居つた。

翌朝起きて見ると、彼狸も與へられた肉を早や食べてしまつて、ノコノコ隅の方に顔を向けて歩いて居つた。

使をやつて此旨、例の彦爺に報知してやつた。爺早速、來訪して、ほんに過日のに能く似て居るといつて、大喜であつた。

此裡を、二ヶ月程経て後、例の從兄の奉職して居

つた學校に生きた標本として寄附しておいた。五年の後、吾輩は旅行の際、立寄つて、狸公を久振りて機嫌をたづねてやつて見たが、彼平氣な顔で、有難うともいはず、又貴殿の計略によつて今は斯うしてと泣言もいはず、何れかといへば、安樂に肥え太つて、呑氣にノコノコして居つた。今でも多分生存へて、幾多年少學生生徒の研究上の參考になつて居るだらうと思ふ。

▲米國感化院の成績　米國が今日まで感化院設立の爲に費したる金額は五千万圓にして毎年の維持費は凡そ一千二百万圓なるが斯く莫大なる金額を感化院の爲に費すは全く無益の事にして悪少年は之に依りて何等の改善を見ずと云ふもの少なからず右に就きて或人の調査したる所に據れば充分此金額に値ひする効果ある由にて感化の効ありと認めて退院を許したるもの、中少なくとも七割五分は正業に就く割合にしてシカゴにては感化院を出でたるもの、收入平均一人一萬圓ありと云ふ



石井泰次郎

小鯛荒しは焼  
御所みかん  
酢どり生姜

小鯛を、うろこを去り、腮及び腸を去り、鹽をふ

りかけて二三分間置き、鹽のきしと思ふころ、  
水をかけて洗ひ、申をうち、あらたによき鹽をふ

りかけて焼くなり、火は、炭火のよくおこりたる  
にて、こんろの両端へ、煉瓦などを立て其上へ鐵

橋を渡し、其上へかけて（火より遠くして）こが  
さぬやうに焼くべし、  
焼けしならば、直に、さめぬうちに、申をぬくべ

し、魚の冷えてよりは、申ぬきがたし  
御所みかんの拵方、

（原料割合）、蜜柑中十五箇、白角寒天二本半、  
（水五合にて煮とcas）、白砂糖百五十匁、味淋  
酒五匁、鹽一匁五分、

先づ、みかんの皮をむき、湯の中につけて、取り  
上げ細申の先にて、白さすじを叮嚀にとり置くべ

し、  
次に、砂糖を鍋に入れ、水一合五匁ほど入れて火

にかけて、煮とかし、溶けしならば、絹ふるひにて  
漉し、塵砂等を去り、再び鍋に入れ、みりん酒と

鹽とを加へて十分間ばかり、木杓子にてかきまわ  
して煮る、

次に、かんでんを、水にて洗ひ、水に漬け置きて  
やわらかになす、やわらかになりしならば、かた

く其をしぼり、庖丁刀にてこまかにきざみ、鍋に  
入れ、水を加へて火にかけ、少しもかたまりのな

き迄、にとけし時、馬尾篩にてこし、  
前の砂糖の鍋の中に入れ、又共に煉り合すこと十

分間ばかりして、ブリキ製の四角の箱へ、半分ば  
かり流し入れ、前の皮をむきたるみかんを、横に

二つに切り、切口を下にして、正しく並べ入れ、

少し置きて、かたまりかゝりし時、残りの半分を又入れ、よくかためるなり、はじめより一度に入るゝ時は、みかんは、中に入らず、上へ浮き出して悪し、少しかたまりてみかんのうごかなくなりたる時、又あとを入れるべし、

よくかたまりたらば、とり出して四角に切るべし、みかんの横に切りたるところ、菊の御紋の如く美しき故御所みかんといふ、

松葉松露のこしらへ方、

(原料)松露三合、かつを煎汁四勺、醬油二勺、砂糖三匁、松葉一と房、

松露の生のものなき時は、鐘詰のものにても同じ、先づよく洗ひ、湯鍋に入れて湯煮し、(十分間ばかり)釜に上げて湯を切り、鍋にかつをだし、醬油、砂糖等を合せて汁を作り、其中に入れ、汁の少なくなる迄煮染むるなり、さて皿に取り上げてさまし、

松葉を一つ一つに取りて水にてよく洗ひ、松露一つへ一本のを、二つさきをわけてさすなり、かく皆松露一つへ松葉一本つゝさすべし、

酢どり生姜のこしらへ方、

生姜は、莖を三寸位つけてあと葉の方を切り去り、よく洗ひ、莖一本づゝに分ち、元の根の所を、庖丁刀にてくるくゝと一皮むき落し、形をなほし、酢にて煮、(莖の方は入れず、根の所だけを酢の中に入れて)深皿に生酢を入れ置き、煮たるを、直に其中に入れて、冷すべし、是を酢どり生姜といふ。皿に盛り方は、鯛を向に、手前の方の左右へ、御所みかん二片ばかりと松露を五つ或は七つ、を盛り、生姜は中央に、鯛の方へ立てかけて置くべし、

▲海底の水の温度

モナコ王は蠶に一隊を編成して海底の研究に従事し居たるが其結果として種々の新事實を發見したり其一是地中海の海底の水は攝氏の十五度を下らざるとなり大西洋に在りては水面下一万呎乃至一万二千呎の所に於て二度に下るとばなり又今一つの極めて有益なる發見は河口に近き海の水は細菌を以て満たさるのみならず極めて遠き大洋の表面にても往々菌の浮遊するともあるも水面下三千呎以下の海水中には毫も細菌を有せざるなりと



短歌

加藤たまも

かつる葉の音もさびしき山寺に秋をやせては鐘もる身かな

眞白なる白梅の花しとねとし亡骸うめぬあはれうぐひす

小さな胸の憂ひに鏡をも忘れて迎ふとしのはるかな

亡き人と我名とかきし辻堂に昔をもほゆ初しぐれ哉

菅原喜代藏

阿修羅王魔どもを具して人の世にせめよ

す如も夜は黒み行く

罪の子を免うかの様秋雨はしといに降り

來草堂の秋  
胸が嶺やさ霧まじろき裳して神々しく立ちぬ秋晴れの日を

敏子

背の君は遠き暗路に亡き乳兒はやせて招くといたづきの夢

骨にしむ霜夜のかねの音をたどり又も亡き兒の夢に泣きぬる

川口愛子

限りなきみ空のはてをさまよひの小さき星

に似たらずや我一ひらの小さき帆の影見送りて夕日に泣きぬ木からしの海

秀子

さだかなる行衛もなくて徒らに亂れ啼きする夕鳥かな  
木枯や隠岐への舟は見えずなりて光りさえ來る七星哉

千山樓主人

うらぶれて冷扉に眠る我果にさも似たらずや雪の水仙

いくとせを家に傳はる劍うりてあはれ書から我さだめ哉

竹鳥芙蓉

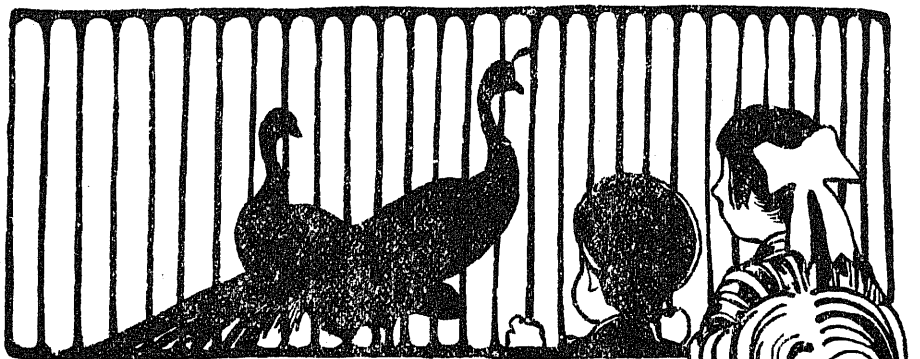
玻璃の戸に霞たばしるわしたなりひと細眉を刷り落しつる

若春や笑みたいへたる唇のいとも小さし紅梅の花

紅梅にうすものかざし舞ふ姫の袖に春たつ朝神樂哉

新年御題  
宮島や松影染ゆる波の上を初あけ鐘のさゝ渡り行く

短歌 伊勢白子区内 眞宮宛



狼と羊と白菜

硯山

三十九

むかしある所に一人の御百姓が市場に狼と羊と白菜とをもつてゆかうと思ひました、ところが途中で一つの細い橋のかゝつてゐる川に參りましたところがこの橋はあまり細いので一度に狼と羊と白菜をもつて渡るとが出来ませんどうしても狼なら狼羊なら羊と一つづゝもつて渡らなければなりません、けれど困つた事には狼をつれて橋を渡るとその留守に羊が白菜を皆食べてしまいますと云つて白菜を持つて渡ろうとすると狼か羊をたべてしまいますと云つてはじめ羊をもつて渡り次に狼をつれてゆけばもう狼を置いて白菜をとりに歸るとが出来ません

いろ／＼と考へた末にこの御百姓はうまい事をかながへつきましたそれは第一にやつぱり羊をつれて渡るので次に狼をつれて渡り歸りがけに復羊をつれてくるのですそしてこんどは羊をいいて白菜をもつて渡り又ひさかへしてきて羊をつれて渡るのですこう云ふ仕方御百姓さんは何もいためずに川を渡りました何と伶俐な人ではありませんか



不思議な薬

硯山人

ひかし〜ある田舎に一人の小人がありました。此小人はせいひの小さい代りに耳が大きくて、まるで兎の様でした。それですから人の話し聲は遠くの方からもよく聞えるので中々耳さとして内所話しなどはうっかり出来ませんでした。けれど此様に耳さといものですから、世間の様子は何かとよく聞えて夫れは〜大したもので村中の事は何んでもよく知り過ぎて居るので誠に困る位でした先づ朝起きると小人「オヤ〜裏の空兵衛さんの處では今日おはぎをこしらへるつて、ツイツは御馳走だね。ナニ〜小人に知れるといけないつて。？ハ、ハ、ハ、ハ、モ一疾つくに聞えて居るに、……………オヤ、今度は隣の太直さんの處で内所話をし

て居るな、なんて云つて居るのだらう。一つ聞いて遣らうか？……………ナニ〜小人に内所だつてアレハおばあさんの聲だナウ、夫れから今日はおすしをこしらへ様かつて勝手に構しらへなさい、何も私に相談は入らない。なぜこゝ世間の人は私に内所〜つて云つて居るのだらう？。何も私が貰ひに行きはしまひし。と小人は一人でぶつ〜云つて居ました。丁度其處へ近所の金棒曳とあだ名されて居るお喋り婆さんが来ました。此婆さんは毎日何も用がないものですから朝から晩迄村中の家を夫れから夫れへと歩き廻はつておしやべりをして遊んで居る人で方々の家の事を皆んな世間へ知らして歩いて仕方のない人でありました。夫れで何時も此小人の家へ来ては種々とおしやべりの種子を買出しては方々へ之を吹聴するのです。今日も亦何時もの通り何か面白いことはないかしらと思つて遣つて来たのです。

婆「ちびさん、今日は！」此おしやべり婆さんは何時も小人を呼ぶのにちびさんと云ふのです

婆「ちびさん、今日は！、大分お寒いね、お正月も一ぢきにおしまいだね、何か面白い事はないかね、」

と尋ねますと、  
小「アハ、ハ、相變らず金棒曳の種子探かしかね、今日は何んにもないよ。あんまりお前が方々へ行つておしやべりするものだから人がみんな、嫌つて居るよ、ちとおしやべりをよしたらよからう」と云ふと

婆「何も私がうそを云やしまいし、いぢやーないか、おしやべり位したつて、御馳走して呉れと云ふのぢやなし、何もわるいことはあるまいぢやないか

小「ウ、御馳走つてば、今日は裏の李兵衛さんの處でおはぎが出きるし、お隣りの太重さん處ではおすしが出来るぞうだ。おばあさんはいぢがきたないから食べたいだらう。」  
婆「何んだね、ちびさん、いゝ加減人を馬鹿にしよとばあさん、ブン／＼怒りながら行つてしまいました。そしてお隣の家の前を通つて村はづれ

の茶店の前に來ますと今しも村中の人が大勢集まつて休んで居ました。茶店のおばあさんは此おしやべり婆さんと懇意なものですから聲をかけて「お婆さんマア御休みなさいよ、お茶の入れ立てがありすから、何も御馳走はありませんが」と云ふとおしやべり婆さんは早速黙つては居ません直に金棒を曳き出しました。

婆「エ、エ、どうもありがたう、ナニもう御馳走なんかいらせんよ、今ニネ甘い／＼御馳走の出來る所をちやんと知つて居ますからね。先づ一つ二つ云ふて見れば小人の裏の李兵衛さんの處ではおはぎが出来るし、お隣りの太重さんの處ではおすしが出来るし、ナント御馳走ではないかね。」

と云ひましたので遂々此二軒の御馳走が村中に知れ渡つてしまいました。こんな風に村中の事は何も角も小人が聞き出してはおしやべり婆さんが云ひふらすので何處の家でもうつかり話することが出來せんでした。しまひには村中の人は誰れも此二人を相手にする人がなくなつて何うかして此

村から二人を逐ひ出してしまふと云ふことになりましたが、扱て何うして逐ひ出さうかと頻りに工夫して居りましたが一向い、考へも浮びませんので今度は村の鎮守の神様に願申して見様と云ふことになつて先づ神主さんの處へ行つてお頼み申すと

神主宜しい、夫れぢや私が神様にお願ひをして見やうと云ふことになつて神主は装束を着て御幣を以て神様の御堂へ上つて

と祝文を讀むと神様は御堂の中から出て御出でになつて

神「コレ、神主願に依つて此村人等に都合のよいことを教へて遣はす」とお仰つた。神主は恐る／＼眼を開いて見ると、丈高く髯白く眞白な装束つけた老人の姿した神様が杖から小さい瓶を出して神主の前に置く所でした。神主は我知らず恐入つてハツと平伏すると神

様は

神「是は不思議の靈藥であるぞよ。是を彼のかしやべり婆さんに云ひ付けて小人の耳に一滴注がせよ。然らば小人の耳は見る間に小さくなりて今迄の様に聞えぬであらう」。

とかしやるかと思ふと神様は見えなくなつた。神主は有りがたき旨を幾度となく神前に御禮申して扱て其藥を持つて御堂から下りて来て村の人に此話をした、夫れではと云ふので先づ村の一人の人が其藥を持つておしやべり婆さんの處へと出掛けて行つて見ると丁度お婆さんはお晝の御飯を食べて居る所でした。

村人「おばあさん、今日は、おばあさんに、いゝもの上げませうか」と云ふと物好のおばあさんだから堪らない。

婆「ナニ、いゝもの？いゝものつて何と」と云ひながら食べ掛けて居たお飯を止めて出て來ました。

村人「おばあさん面白いのつて、是さ、是はね神様から戴いた不思議な藥でね、之を付けると大

きなものなんでも小さくなるのだよ、面白いだらう？ 小人の耳などは直ぐに小さくなつてあたり前の人の位になるよ、そして今度亦大きくなる薬を貰つて付けければ小人の勢が大きくなつてあたり前の人になつてしまふだらうよ」と云ひますのでお婆さんは大喜び

婆「それは面白いね、夫れちや小人の寝て居る時にそつと私が付けて遣らう」と云つて其薬を貰つてしまひました。そして小人の寝て居る時はなからうかとそつと小人の家をのぞきに行きました。

こちらは兎耳の小人、そんなことは夢にも知らず今日は何時になく暖かい日和で氣も心も暢び伸びして居る上に今お晝の御飯をしまつた許りでお腹は一杯、暖かい椽側に長々と横になつて蟹の甲らし宜しくと云ふ見えて日向ぼこりして居りますと何時の間にか眼が催ふして來て、つい、うとくと寝てしまひました。

かしやべり婆さんは此様を見て得たり賢しと拔足さし足、ソーッと寝て居る小人に近づいて小ささ

瓶の口傾けて靈藥一滴ボタリと垂らすとコレハ  
 小人の大耳は一振二振揺れると見る間に段々と小  
 さくなつて今度は丁度鼠の耳の様になつてしま  
 しました。之を見たお婆さんは面白くておかしく堪  
 まらず、我知らず大聲を出しそうでしたので急い  
 で瓶のコロップ持つた手で口を押へましたから堪  
 らない、お婆さんの流石の大口もくしやくと縮  
 まつて丁度人形の口位になつてしまひました。

是からと云ふのはお婆さんはかしやべりでなくな  
 り、小人は村中の事を聞き出さないいで世間は誠  
 におたやかに暮される様になりました。

めでたし〜



ゑびの話 某女

アノネ、皆さん先生が今はこんなに大きくなつた  
 でせう、けれども不また皆さんの様に小さかつた  
 時、オ、さう、丁度七歳の時でした。七つでは  
 皆さん位ですネ、まだ田舎のお家に居つた頃でし  
 た。おうちのうらに小さい川があつたんです。川  
 中が此位で水の深さが先生の其時の膝位でした。  
 夏の暑い日などにははだして目高を逐ひ廻はすの  
 が大層面白いものでした。或日のこと先生が何時  
 もの様に川の中をのぞいて見ますと何處から昇つ  
 て来たのか、澤山なえびがピン／＼と泳いで居ま  
 した。先生は大悦びでお家へかけて行つて籠を持  
 つて来て、それからかうやつてシユツとすくつた  
 のです。スルト、まあ澤山なえびがとれてざるの  
 中はアツチでもピン／＼、コツチでもピン／＼と  
 はねて居るのです。先生はもううれしく／＼す  
 ぐにお家へ持つて歸つて桶の中に水を入れて飼つ  
 て置きました。スルト或時其えびと先生と不思議  
 なお話を致しました。今其お話を皆さんに聞かせ

て上げませう。  
 或時、其えびが桶の中で、かうやつて面白さうに  
 遊いでゐるでせう。それで、先生よく見てゐた  
 ら、何だかこんな長いひげが二本あつて、こんな  
 にして、かうやつておよいでゐるんですよ。其な  
 が、いいひげのあるえびを見せてあげませうネ。(標  
 本提出) そーらこんな長いんですよ。  
 それでネ、こんなながいひげがあつては、およ  
 ぐのに邪魔だらうからとつてやらうと思ひまし  
 て、手をかうやつて水の中にそーつと入れたんで  
 すよ。そうすると、えびがびつくりしたやうにし  
 ゆつ／＼とひかふの方に上げてしまつたんですよ。  
 だから先生はネ、オヤ／＼そんな邪魔けなものな  
 い方がよいだらうにつて、そーいひましたらえび  
 がネ、  
 「先生!!! それは／＼とんでもない、此ひげがもを  
 ン私の大じなものなんですものつてさういひま  
 すからネ、なぜそんなもの大じなんですかつてさ  
 うきいたらえびさんはネ、でも先生私がかうやつ  
 ておよいでゐるのに石になんかつきわたるといけ

ないでせうだから、かうやつてこれを動かしてあ  
 此所に石があつていられないなと思ふたらちよつ  
 とこやつて外の方に向いていくんですよ、だか  
 ら先生はネぢやえびさん、あなたに目がないで  
 せうネそれでめくらの人みたやうにこんなにして  
 およいでゐるでせうネ一つてさういふたらえびさ  
 んおこつたんですよそしてネそれわ私にだつて目  
 がありませんよそして皆さんのやうにこんなもの  
 (まぶた) がなくてちやーんと高いところにとび  
 出してゐるから何でもよく見えますよそして後  
 の方から誰かいたづらでもしそうな時には目をす  
 ぐに後の方にむけてみてさ来たなつと思つて見え  
 ない方に向けていくんですよそれからかうやつてにげ  
 るんですよつてしゆつと向ふの方に行つたんです  
 よ其かよぎ方つたらほんとに上手なんですもの  
 先生びつくりいたしましたよそしてネ余り上手な  
 のできつと大きなひれをもつてゐるんだらうと思  
 うてかうやつて見たけれどもひれがないんですよ  
 だもんで先生ふしぎでたまらなくなつてえびさん  
 あなたのからだに一ツもひれがないのによくそ

んなに上手にかよびますよつてさういふたら先生  
 〳〵あのー私のからだには金魚さんなんぞ持つて  
 いらつしやるひれなんかよりもつと〳〵よいもの  
 があるんですよそーら御らんないつてかうやつ  
 て先生に見せたんですよ皆さんこれネよくわかる  
 でせうほんとに金魚のひれとにちがひますネー  
 そしてネ先生はえびさんのところをよく見たら何  
 だかこんなにしてお腰が曲つてゐるやうなんです  
 よだから先生はネア、ラをかしいのネ此えびさん  
 お腰をまげてるよもういくつになつたのおばあさ  
 んのやうネつてさういふたらえびは笑つてアハ、  
 ハ、私をおばあさんなんて先生ちつともしらな  
 いんでせうぢやネ先生私の腰をまげてるわけをお  
 話してあげませうかつてさういひましたからエ話  
 して下さいつて先生はいふたんですよもしたらネ  
 えびさんはあのー皆さんだつて兎さんだつてびよ  
 ん〳〵はねる時にはかうやつてお腰をまげるでせ  
 う私だつて水の中で遊いだりはねたりする時には  
 かうやるんですよだから御腰をまげるんですよつ  
 てさういふんですよだからウムさうか先生も一ツ



腰が曲るかどうか一寸はねて見やうつてびよんとはねたんですよそしたらえびさんはネーア、びつくりした先生そんな大きなからだしてはねるんですもの。つてさういふたからネえびさん、いくらはねたつてえびさんには耳がないからきこえないぢやありませんかといふたらあー私にだつて耳がありますよそらこゝにネつてをしへたんですよそら御らんなさいこゝにあるでせうそれからネ御鼻もありませんよつてさういふからどこにつていたら此ちいさなひげのさきーのほうにあるけれども小さくて見えないでせうといひましたよこゝにあるんですつてでもほんとに小さくて見えませんネーそうするとえびにも鼻も耳もありません先生そんなものないとはつかり思うて居たのにえびさんからわるつてきいてやつとわかつたんですよでもネ先生其時見たえびは赤くなかつたんですよ皆さんの御うちでお正月に御飾りなさるのほどないんです……さうですネでも其時は赤くないからえびさん、先生がいつも見ますえびさんは赤いんだかわなはちつとも赤くはないやう

ですが一体どうしたんですかつてきいて見たらそれわ先生私だつて生きてる時にはこんないろをしてをりますけれども死んでしまつてうでられたりわんなお正月に御かざりするやうな赤い色になるとますよつてさういふてきかしたんですよほんとにえびさんてふしぎな事ばかりいひますネーさ皆さんによりくえびを見せてあげますよ

記者曰、此話は材料としては可なりのものではあるが話中に冗語が多くて實際に此まゝ用ゆるときは幼児の興味を殺ぐことが多いだらうと思ひなす、時が編輯に切に差迫りましたので改作することが出来ませんでしたから、原文のまま載せました。其お積りで御使用の際は改作を願ひます。又作話が現実界と空想界とを混亂しては居ります、今別段訂正致しませんでした讀者は此點も御注意下さる様願ひます

フレールベル會發行

# 幼稚園遊戯

定價金四拾錢 郵稅四錢  
會員特價參拾錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてあります。世の幼稚園に關係せらるゝ方々は是非一本を座右に備へられんことを望みます。

尙本書には女子高等師範學校内にて作られた幼児用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ保育要項とを附録として採録致しました。

フレールベル會發行

# 幼児談話材料

定價金四十錢 郵稅四錢  
會員特價參拾錢

世に行はれて居る多くのお伽話は幼児教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼児の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼児に最も適當なものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼児教育に關係して居らるゝ方は是を標準として作話せられんことを希望致します。

謹賀新年

積年の經驗と熱心なる研究とに依て益々品質を改良し價格を低廉になし得たるは本店の私に欣ぶ所に候今や内地は云ふに及ばす遠く海外の需用にも應ずるの光榮を荷ふに至り候御眷顧の段深く奉感謝候

- ▼積木排板箸排環排は寸法正確体裁優美也
- ▼摺紙縹紙は色合適法紙質善良裁目整正也
- ▼圓柱分解柁木は最近米國幼稚園に行はれ小店今回摸製したり趣味津津たる者なり
- ▼花形貼紙は本店創製にて近來益種類を増加せり縫取畫き方と共に幼兒は最も喜ぶ

最も完備せる

幼稚園恩物

を製造せんが爲に全力を注ぎ居れる弊店が苦心に御留意あらむ事を乞ふ

幼稚園恩物の兄弟とも云ふべき手工工器具材料及標本の發賣は本店の嚆矢にして天真堂の品に限るとは世の定評に候本年は御愛顧に報むん爲大擴張大發展を致す覺悟に候間倍舊御引立の程偏に願上候也

- ▲幼稚園藝用の鋤鍬●小形のテニス具●木銃背囊●啞鈴●旗●運動帽等は幼兒体育の上に於て又智徳教育の上に於て有効也
- ▲幼稚園掛圖は金太郎舌切雀浦島太郎兵士看護婦朝顔等の題目を選び美麗高尚に畫きたる幼稚園必要品貳圓四十錢運賃不要

大阪市東區島町 天眞堂 電話長話東五〇九六

店主清水常次郎

明治四十一年一月五日印刷 發行所 女子高等師範學校内

編輯者 辻本卯藏 印刷者 日下主計

發行所 又レール會